

六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、六原学舎新築工事に伴う六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

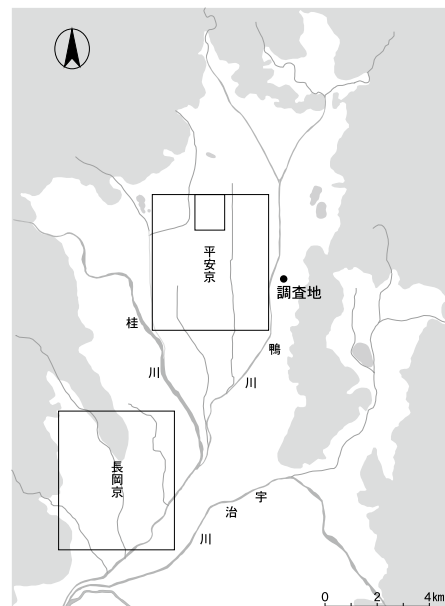
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成26年1月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡
- 2 調査所在地 京都市東山区松原通大和大路東入2丁目轆轤町82（元六原小学校内）
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2013年6月17日～2013年9月18日
- 5 調査面積 518㎡
- 6 調査担当者 田中利津子・布川豊治・津々池惣一・南出俊彦
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 1区は1番から、2区は501番から通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、金属製品は「金」、骨製品は「骨」、土製品は「土」、石製品は「石」をそれぞれ付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 田中利津子
付章1：小野映介（新潟大学）、河角龍典（立命館大学）
付章2：パリノ・サーヴェイ株式会社
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



（調査地点図）

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 歴史的環境と立地	4
(2) 既往の調査	4
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 遺構の概要	6
(3) 1区の遺構	11
(4) 2区の遺構	19
(5) 火山灰層の調査	25
4. 遺 物	26
(1) 遺物の概要	26
(2) 土器類	27
(3) 瓦類	37
(4) 金属製品・骨製品	40
(5) 土製品	41
(6) 石製品	43
5. ま と め	47
付章1 始良Tn(AT)火山灰分析	53
付章2 花粉分析	56

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区全景（北西から）
		2	1 期 土坑 1 南壁断面（北から）
図版 2	遺構	1	1 期 土坑 12 検出状況（南から）
		2	1 期 土坑 76 完掘状況（北から）
		3	2 期 井戸 22（東から）
		4	2 期 井戸 24（北から）
図版 3	遺構	1	3 期 溝 72（南から）
		2	4 期 流路 74（南から）
図版 4	遺構	1	4 期 流路 74 土器出土状況（北から）
		2	北壁断割状況（南東から）
		3	2 区全景（東から）
図版 5	遺構	1	2 期 溝 513・土橋 572 検出状況（北東から）
		2	2 期 土橋 572 南石列検出状況（南から）
図版 6	遺物		出土土器 1
図版 7	遺物		出土土器 2
図版 8	遺物		瓦・金属製品・土製品・石製品

挿 図 目 次

図 1	調査地および周辺の調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：1,000）	2
図 3	調査前全景（北西から）	3
図 4	1 区作業風景（西から）	3
図 5	夏期教室発掘体験風景（南から）	3
図 6	夏期教室発掘体験風景（東から）	3
図 7	「京の文化行政（夏期集中講座）」風景（南から）	3
図 8	地元説明会風景（北から）	3
図 9	1 区北壁断面図（1：100）	7
図 10	1 区南壁断面図（1：100）	8

図11	2区南壁・西壁断面図（1：100）	9
図12	1区1期遺構平面図〔江戸時代〕（1：150）	10
図13	南北セクション断面図（1：50）	11
図14	土坑12実測図（1：20）	11
図15	1区2期遺構平面図〔室町時代〕（1：150）	12
図16	柵1実測図（1：50）	13
図17	柱穴3・6・35・55・63・81実測図（1：30）	14
図18	井戸22実測図（1：20）	14
図19	井戸24実測図（1：20、1：40）	15
図20	1区3期遺構平面図〔平安時代〕（1：150）	16
図21	溝72断面図（1：50）	17
図22	1区4期遺構平面図〔弥生時代後期〕（1：150）	18
図23	流路74・75断面図（1：50）	19
図24	2区1期遺構平面図〔江戸時代〕（1：150）	20
図25	柱穴列1・2実測図（1：50）	21
図26	2区2期遺構平面図〔室町時代〕（1：150）	22
図27	土橋572・溝513実測図（1：50）	23
図28	東西セクション断面図（1：50）	24
図29	柱穴540実測図（1：50）	24
図30	1区出土土器実測図1〔弥生時代後期〕（1：4）	27
図31	1区出土土器実測図2〔平安時代〕（1：4）	28
図32	1区出土土器実測図3〔鎌倉時代から室町時代〕（1：4）	29
図33	1区出土土器実測図4〔江戸時代〕（1：4）	30
図34	1区出土土器実測図5〔江戸時代後期から明治初頭〕（1：4）	31
図35	1区出土土器実測図6〔江戸時代後期から明治初頭〕（1：4）	32
図36	2区出土土器実測図1〔鎌倉時代後半から室町時代前期〕（1：4）	34
図37	2区出土土器実測図2〔室町時代後期〕（1：4）	36
図38	瓦類拓影・実測図1（1：4）	38
図39	瓦類拓影・実測図2（1：4）	39
図40	金属製品・骨製品実測図（1：2）	40
図41	泥塔模式図	41
図42	土製品実測図（1：4、1・2は1：2）	42
図43	石製品実測図1（1：4）	43
図44	石製品実測図2（1：8）	44
図45	石製品実測図3（1：8）	45

図46	調査区旧地形模式図（1：400）	47
図47	遺構変遷図1（1：500）	48
図48	遺構変遷図2（1：500）	50

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	26

六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、2011年度の調査に続き、京都市立開晴小・中学校六原学舎新築工事に伴うものである。調査地は京都市東山区松原通大和¹⁾大路東入2丁目轆轤町82の元京都市立六原小学校内に所在し、六波羅蜜寺の北側、西福寺の南側に隣接する。『京都市遺跡地図台帳』では、六波羅蜜寺境内および六波羅政庁跡にあたる。調査に先立ち、調査区の位置の確定を行い、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の臨検を受けた。

(2) 調査の経過（図1～8）

調査区は、元六原小学校の校舎と講堂を解体した跡地で、2011年度調査の東区を挟んで北側部分（1区）と、南側部分（2区）の2箇所である。1区は2011年度調査で検出した六波羅蜜寺本堂北門と考える遺構の北側にあたり、2区はその南側となる。

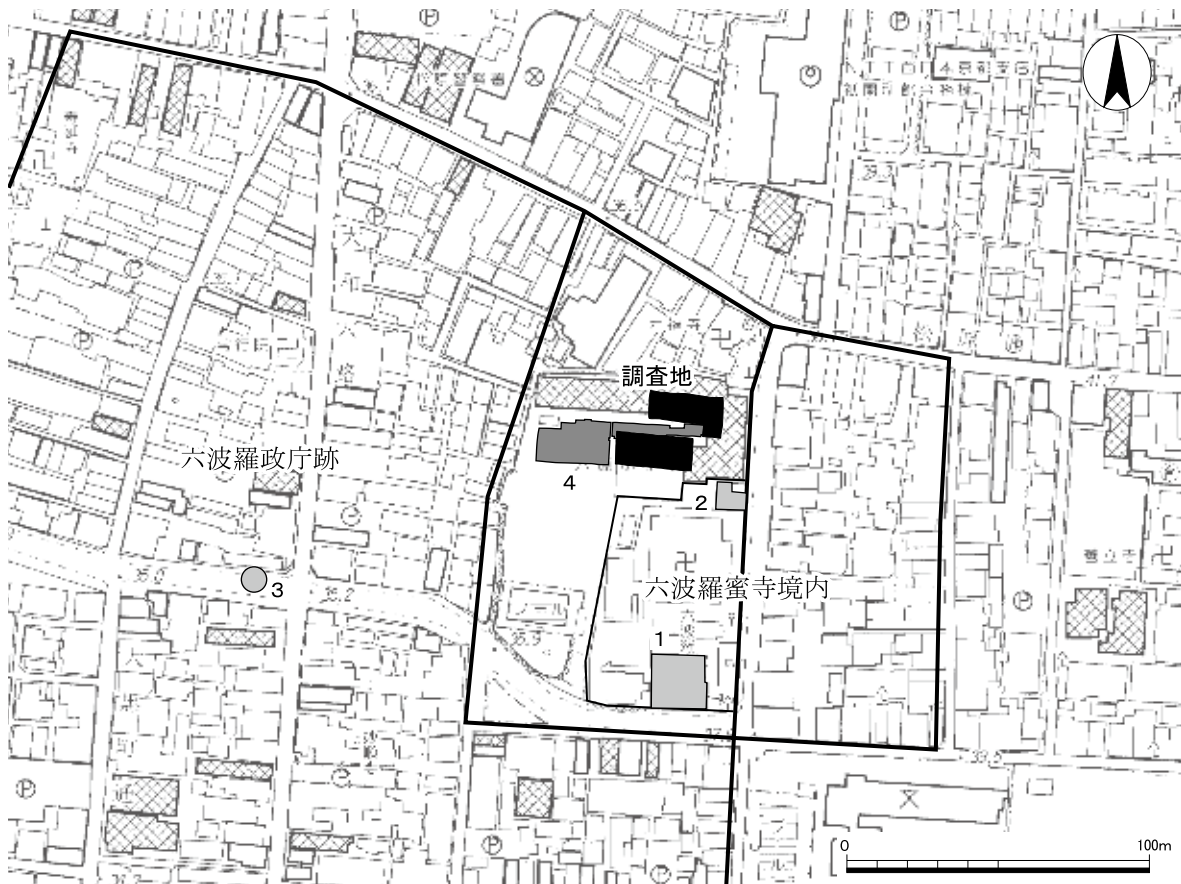


図1 調査地および周辺の調査位置図（1：2,500）

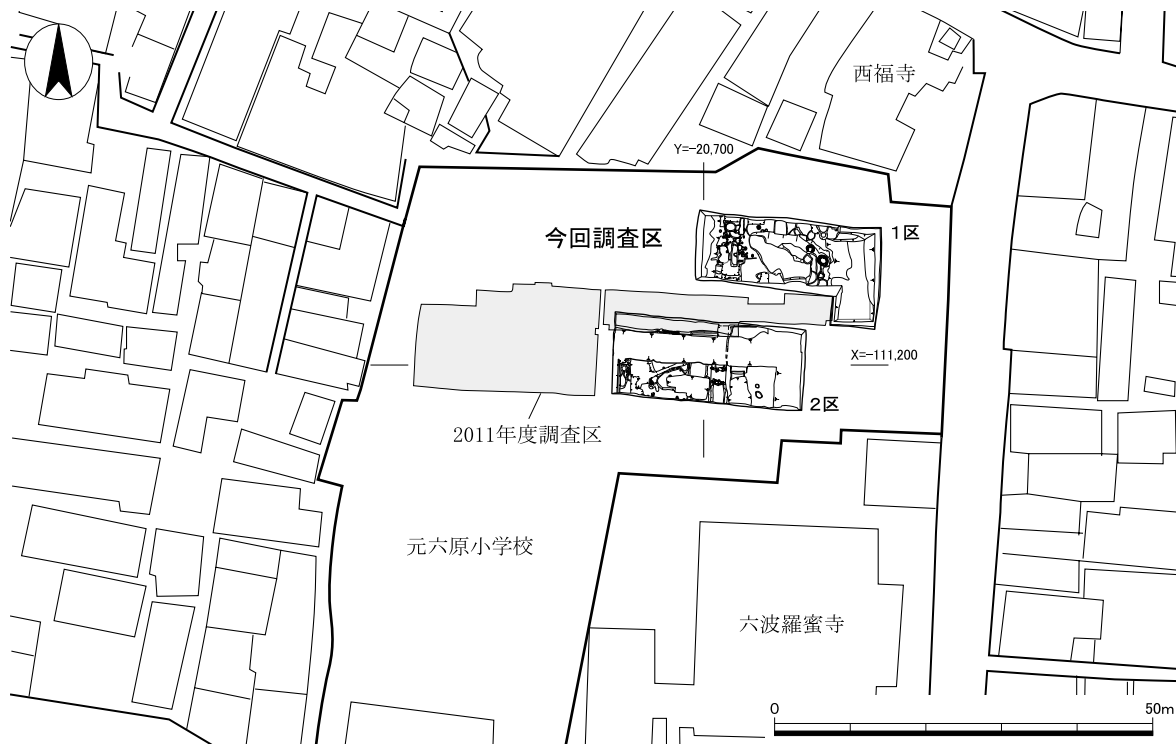


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

1区は現地表面から厚さ0.6～0.8mまで現代盛土を重機で掘削し、その後は人力により調査を進めた。調査区の東西両側は既存校舎の地下室掘形によって深く掘削されており、遺構は残存していない。また、中央は江戸時代から明治初頭の大きく深い土坑となるため地表下2.5mまで重機で掘り下げた。遺構面は1面で、4時期の遺構があり、江戸時代(1期)、室町時代(2期)、平安時代(3期)、弥生時代後期(4期)に分けて調査した。

2区は現地表面から厚さ0.4～0.7mまで現代盛土を重機で掘削し、その後は人力により進めた。調査区の随所に解体された講堂のコンクリート基礎があり、その間に残された部分の調査となった。遺構面は1面で、江戸時代と室町時代の2時期の遺構を検出した。

地山の下層で火山灰層を確認したため補足調査として1区は北壁、2区は土坑の一部を断ち割り、調査を行った。また、1区では古環境復元のため弥生時代の流路埋土の花粉分析を株式会社パリノ・サーヴェイに依頼した。なお、掘削土はすべて調査地内で処理し、コンクリート・鉄管・レンガなどのガラを分別・搬出して調査を終了した。調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、検証委員の鈴木久男氏(京都産業大学教授)、國下多美樹氏(龍谷大学教授)の視察を受けた。他に普及啓発事業の一環として8月7日(水)・8日(木)に京都市考古資料館主催の夏期教室で親子の発掘体験を行い、2日間でのべ37名の参加があった。また8月29日(木)に京都市と大学協賛「京の文化行政(夏期集中講座)」で発掘現場の見学に大学生78名が参加、9月7日(土)には地元(六原学区)向け現地説明会を行い、約50名の参加があった。

註

1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年



図3 調査前全景（北西から）



図4 1区作業風景（西から）



図5 夏期教室発掘体験風景（南から）



図6 夏期教室発掘体験風景（東から）



図7 「京の文化行政（夏期集中講座）」風景（南から）



図8 地元説明会風景（北から）

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地周辺は、東山から鴨川に至る斜面に位置し、地形分類図によれば¹⁾、地質は古生層の山地から続く旧期洪積層からなる傾斜地に分類される。平地は花崗岩砂を含む砂質砂層から形成される。また、東山連峰から続く数本の谷筋は2つの断層によって南東から北西方向を示している。

調査地一帯は古墳時代から続く葬送の地で、平安時代に鳥辺野とよばれる地域であった。鳥辺野は、阿弥陀ヶ峰を中心に西に向かって扇状に広がる広大な地を占めており、調査地北東には5世紀頃の將軍塚古墳群が、南東の今熊野周辺にはやや時代の下がる鳥戸野古墳群が所在する。西の化野、北の蓮台野とともに葬送地として強く意識されるのは平安時代中期以降である。応和3年(963)、空也上人がこの地に六波羅蜜寺の前身となる西光寺を建立する。その後、貞元2年(977)に堂舎を修復し、寺号を六波羅蜜寺と改めた。六波羅の地名は鬮原や東山山麓(麓原)が訛ったものという伝承があり、平安時代末期には平家一門の六波羅邸が築かれた。しかし、文治元年(1185)、壇ノ浦の合戦で平家が滅亡、その後、源頼朝が頼盛の池殿の跡を接收し邸宅を建て、北条氏が鎌倉幕府の政庁(六波羅探題)を設けた。その間、六波羅蜜寺はたびたび火災に遭っており、現在の本堂は貞治2年(1363)から5年間かけて再建され、それを昭和40～43年(1965～1968)に解体修理したものである²⁾。この時、現本堂須弥壇下にあたる部分から多数の埋納された泥塔が出土している。『都名所図絵』(1780)には江戸時代の六波羅蜜寺境内の様子が描かれている。明治2年(1869)、六原小学校の前身である下京第二十八番小学校が門脇町に開かれた。明治5年(1872)、下京第二十一番組小学校として改められ、六波羅蜜寺の敷地を買い、この地に学校を建てる。その後明治9年(1876)に六原小学校と改められ、昭和3年(1928)、鉄筋コンクリートの校舎と講堂が建てられ、現在に至る⁴⁾。

(2) 既往の調査(図1)

周辺では、4箇所の調査が実施されている。1は1975年度の六波羅蜜寺境内南側の調査で、平安時代末から鎌倉時代の柱穴や近世の土取穴を検出した。出土した遺物は、平安時代の緑釉陶器小片・土師器皿・軒瓦、中世の陶器・五輪塔、近世の塩壺などがある。2は六波羅蜜寺境内北側の調査で、地表下0.5mで平安時代の包含層や土坑、1.4mで古墳時代前期の流路などを検出した。出土した遺物は、流路から混入した弥生土器片が、平安時代中期の包含層から土師器皿・須恵器・緑釉陶器の他に混入した古墳時代の円筒埴輪片がある。平安時代後期の土坑や包含層からは土師器・瓦器・瓦などが出土した⁶⁾。3は立会調査で、地表下1.3～1.5mで鎌倉時代時代の包含層、地表下1.5m以下で鎌倉時代以前の路面を検出している⁷⁾。4は今回と同じ事業の2011年度調査で、元六原小学校の校舎と講堂に挟まれた部分(東区)とグラウンドに続く部分(西区)の2箇所の調査である。東区では地表下0.8～1.4mの地山直上で室町時代の遺構を、西区では地表下0.9～3.0mで近世や室町

時代を検出した。室町時代の遺物包含層直下の地山上面では平安時代から鎌倉時代の遺構や奈良時代の流路を検出した。室町時代の遺構は、東区で六波羅蜜寺の北門や東西方向の内溝などを、西区で溝の他に防御施設と考えられる建物や堀・門・塀などを検出した。平安時代から鎌倉時代の遺構には、井戸・柱穴・土坑などがある。出土遺物には、流路から弥生土器や古墳時代から奈良時代の土師器甕・須恵器甕が、平安時代の土坑や遺物包含層から土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、鎌倉時代の井戸からは土師器・瓦器・中国産磁器がある。室町時代の遺物は土師器・瓦器・中国産磁器・国産施釉陶器がある。特に瓦器鍋・羽釜・茶釜が多い。⁸⁾

註

- 1) 「六原学区」『史料 京都の歴史 第10巻 東山区』平凡社 1992年
- 2) 『重要文化財六波羅蜜寺本堂修理工事報告書』京都府教育委員会 1968年
- 3) 新修「京都叢書」第六巻 臨川書店 1967年
- 4) 『ろくはら』京都市立六原小学校 1969年
- 5) 発掘調査 未報告
- 6) 前田義明「六波羅政庁跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 7) 『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 8) 『六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図9～11・13・28)

1区 基本層序は現代盛土が厚さ0.6～2.2mで、西から東に行くほど厚くなる。北西部は盛土の下に近代の整地層(図9-1・2層、図13-1～3層)が厚さ0.3mある。南西部には室町時代の遺物包含層(図10-32層)が厚さ0.4mで一部残存する。これら整地層の下にはぶい黄色シルトの地山(図9-40層)となり、東半は現代盛土の直下が地山面となる。西半では江戸時代と室町時代の遺構を、東半では室町時代、平安時代、弥生時代後期の遺構を検出した。地山(図9-40層)直下で始良火山灰(AT)(図9-41層、図13-16層)を検出した。火山灰は西半ではほぼ水平に堆積しており、東側は攪乱や遺構で削平される。地山検出面の標高は西が37.2m、東が36.1mである。

2区 基本層序は現代盛土が厚さ0.5～0.8mあり、その下が地山となる。地山上面で江戸時代と室町時代の2時期の遺構を検出した。2区では浅黄色シルト(図28-20層)直下で始良火山灰(AT)(図28-21層)を検出した。地山検出面の標高は37.3mである。

(2) 遺構の概要

1区 検出した遺構は4時期のものがあり、1期は江戸時代、2期は室町時代、3期は平安時代、4期は弥生時代とした。1期の遺構には土坑がある。中央で検出した大規模な土坑1の他に、西・北部で土坑を検出した。2期の遺構には柵・柱穴・井戸・土坑などがある。柱穴は西側で多く検出した。井戸は2基あり、土坑1の東側で検出した。井戸の南側では重なりあった3基の土坑を検出している。3期の遺構は中央東寄りで南北方向の溝を1条、4期は南北方向の流路を検出した。流路は2時期に分かれることが壁断面の土層から判明した。

2区 検出した遺構は2時期あり、1期は江戸時代、2期は室町時代とした。1期の遺構には南側で検出した柱穴列・土坑が、2期の遺構には溝・土橋・土坑・柱穴などがある。

検出した遺構総数は153基(1区81基、2区72基)である。ここでは主要となる遺構を検出面ごとに報告し、調査地の歴史的変遷はまとめて後述する。なお、1区の遺構には1番から、2区の遺構には501番から番号を付けた。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
弥生時代	1区流路74・75
平安時代	1区溝72
室町時代	1区柵1、井戸22・24、土坑23・67・68・70・77・78・79、柱穴3・6・55・63など 2区土橋572、溝511・513・541、土坑508・509・512・542・545・571、柱穴540など
江戸時代	1区土坑1・2・12・15・19・45・60・61・76 2区柱穴列1・2、土坑など

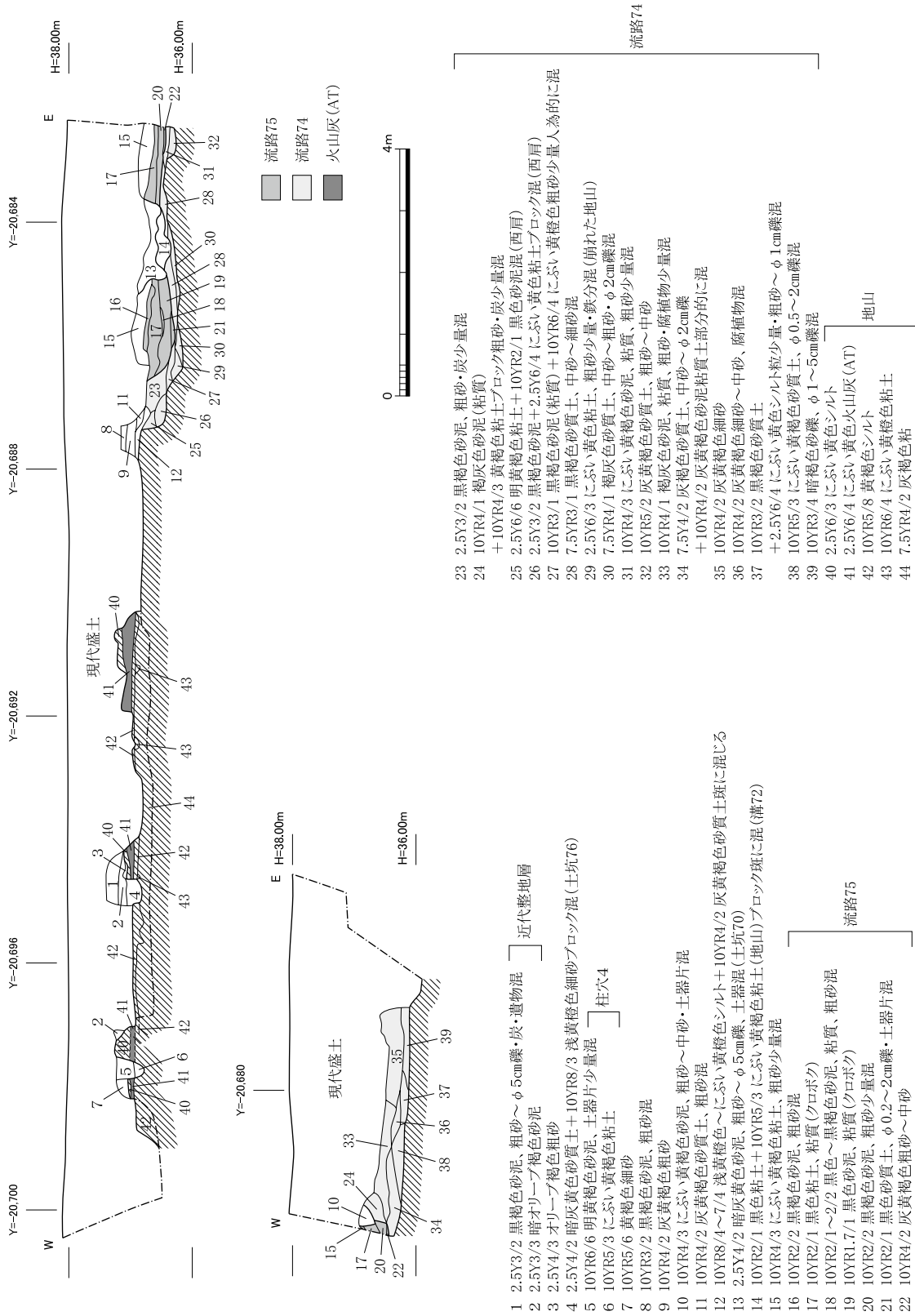


図9 1区北壁断面図(1:100)



図10 1区南壁断面図 (1 : 100)

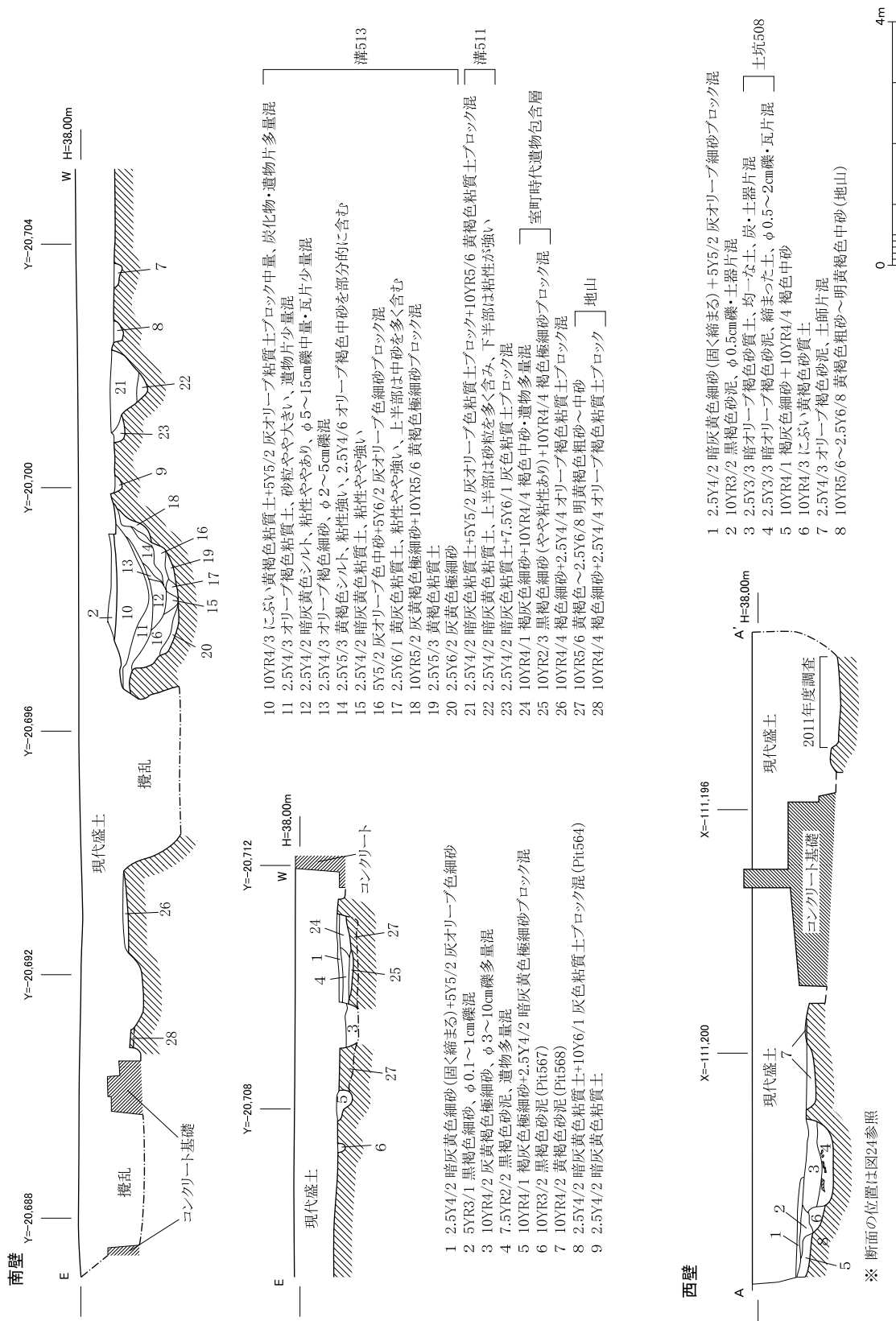


図11 2区南壁・西壁断面図 (1:100)



図12 1区1期遺構平面図 [江戸時代] (1 : 150)

(3) 1区の遺構 (図13～23、図版1～4)

1) 1期 (江戸時代) の遺構 (図12)

土坑を9基検出した。

土坑1 (図10、図版1-2) 調査区中央で検出した。平面形は不定形で、東西約10.5m、南北6.0m、深さ2.3mある。南は2011年度調査の土坑55につながる。埋土から江戸時代後期から明治

初頭の遺物が多量に出土しており、その内容から巨大なゴミ穴と考えられる。六原学校が建設される明治5年 (1873) までには埋められていた。

土坑2 調査区の西半で検出した。長径1.4m、短径1.2m、深さ0.36mの平面形がほぼ円形の土坑である。炭が混じった黒褐色砂泥の埋土から瓦とともに江戸時代中期の土器が出土した。

土坑12 (図14、図版2-1) 調査区西半で検出した平面形が長方形の土坑である。検出規模は東西0.9m、南北3.3m、深さ0.5mで、埋土から多量の礫と土器が出土した。土取り穴と考えられる。

土坑19 調査区北側で検出した土坑で東西1.5m、南北0.8m、深さ0.3mある。北壁で校舎基礎に削られる。灰黄褐色砂泥の埋土に径5～10cmの礫や瓦片が詰まる。土器が出土した。

土坑60 調査区中央東寄りで検出した土坑で、東西1.0m、南北0.7m以上あり、南は土坑1に削られる。暗オリーブ褐色の埋土から江戸時代後期の土器とともに室町時代の中国産の磁器が出土した。

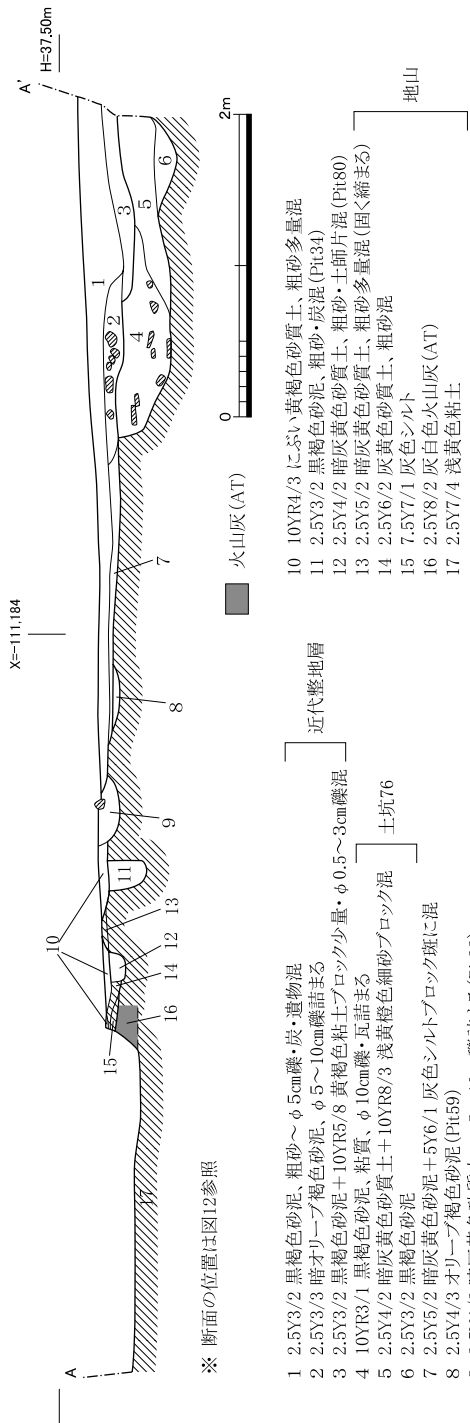


図13 南北セクション断面図 (1:50)

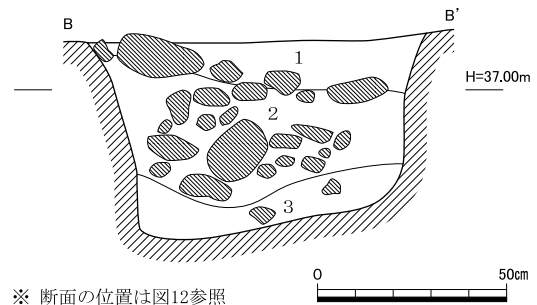


図14 土坑12実測図 (1:20)



図15 1区2期遺構平面図 [室町時代] (1 : 150)

土坑76(図13、図版2-2) 調査区西半で検出した土坑で、平面形が長方形である。検出規模は土坑12よりやや小振りで東西0.7m、南北2.2m、深さ0.3mある。土取り穴と考えられる。

上記以外に調査区西側で土坑45・61、北側で土坑15を検出した。

2) 2期(室町時代)の遺構(図15)

柵・柱穴・井戸・土坑などを検出した。柵の東側で数多くの柱穴を検出した。柱穴には礎石を据えたものや拳大の礫を詰めたものがあるが、建物として復元できない。

柵1(図16) 調査区西端で検出した南北方向の柱穴列で、柱穴が5基(柱穴4・7・9・28・62)並ぶ。柱間は2.0mで、長さ8.0m以上、南北ともに調査区外に延長する。方位は北でやや東に振れる。柱穴4・62は北・南壁で検出した。柱穴9・28・62は根石が入る。柵1はその位置から、2011年度調査で検出した六波羅蜜寺本堂北門に通じる道路の東側を区画するものと考えられる。

柱穴3(図17) 調査区北西で検出した。規模は直径0.6m、深さ0.4mあり、北は校舎基礎に、南は土坑2に削られる。埋土から室町時代後期の土師器が出土した。

柱穴6(図17) 調査区西半で検出した。東西0.34m、南北0.42m、深さ0.12mの円形を呈し、径約20cmの礎石を据える。東西両側の柱穴81・63を切って成立している。

柱穴35(図17) 調査区北側で検出した。直径0.46m、深さ0.25mあり、径5~15cmの礫が詰まる。

柱穴55(図17) 調査区西半で検出した。径0.5mの円形で、深さ0.16mあり、径8~20cmの根固め石を入れる。

柱穴63(図17) 調査区西半で検出した。東西0.26m、南北0.2m、深さ0.1mの楕円形を呈する。径10cmの礎石を据える。

柱穴81(図17) 調査区西半で検出した。東西0.24m、南北0.42m、深さ0.28mあり、礎石を2

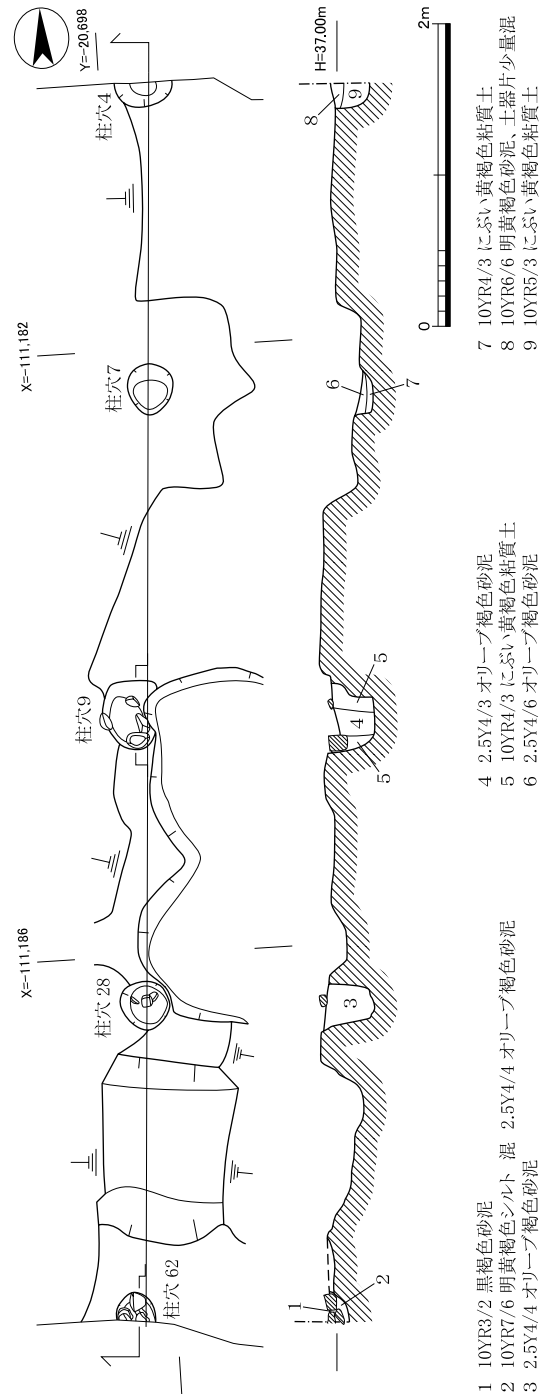
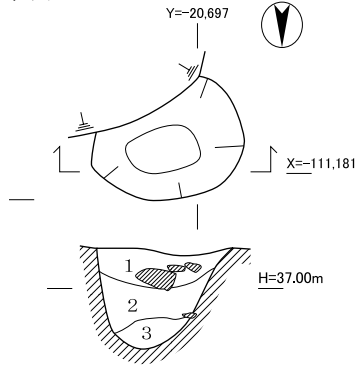


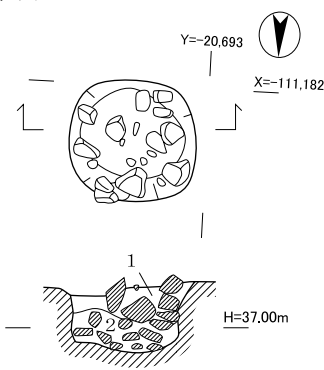
図16 柵1実測図(1:50)

柱穴 3



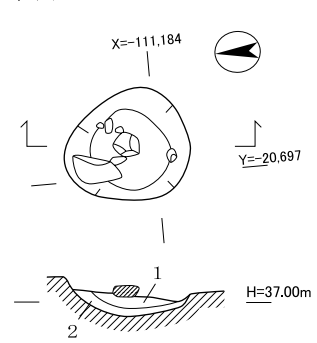
- 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
+2.5Y6/4 にぶい黄色シルトブロック混
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂

柱穴35



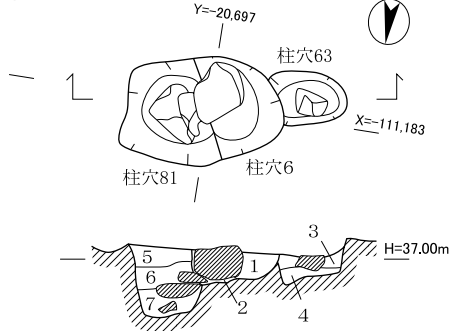
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥
+2.5YR5/3 黄褐色シルトブロック混

柱穴55



- 1 10YR2/3 黒褐色砂泥
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥
+10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥

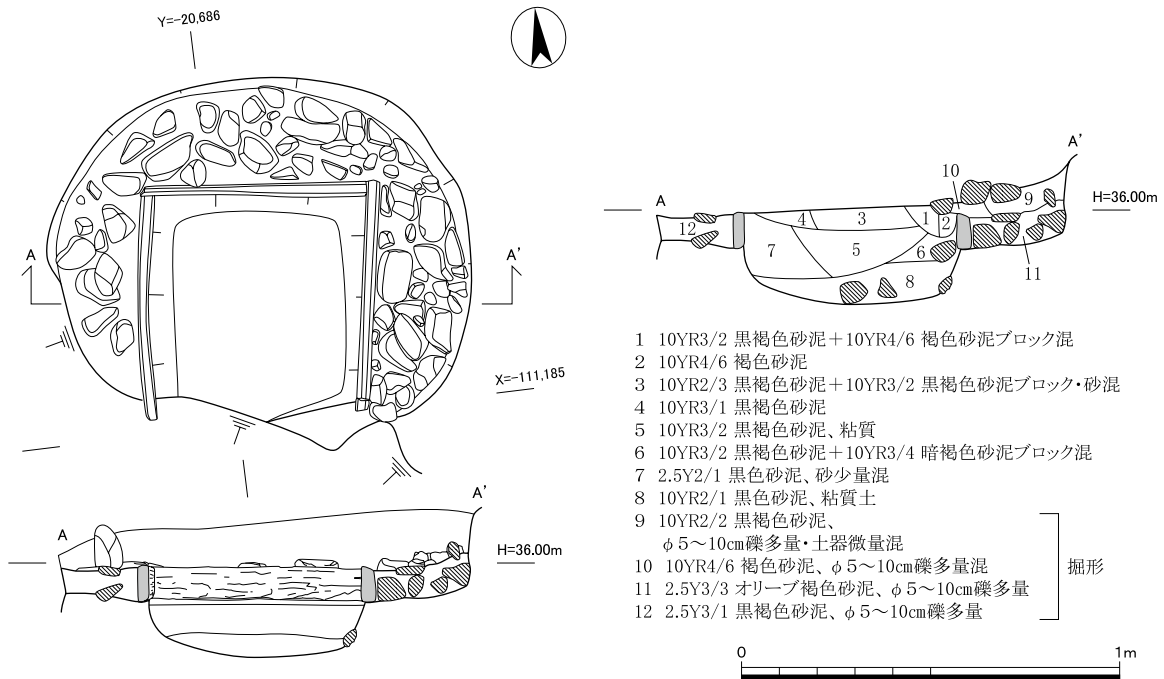
柱穴 6・63・81



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 2 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
- 3 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
- 4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
+2.5Y8/3 淡黄色シルトブロック混
- 5 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
+2.5Y7/2 灰黄色シルトブロック混



図17 柱穴 3・6・35・55・63・81実測図 (1:30)



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥+10YR4/6 褐色砂泥ブロック混
- 2 10YR4/6 褐色砂泥
- 3 10YR2/3 黒褐色砂泥+10YR3/2 黒褐色砂泥ブロック・砂混
- 4 10YR3/1 黒褐色砂泥
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥、粘質
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥+10YR3/4 暗褐色砂泥ブロック混
- 7 2.5Y2/1 黒色砂泥、砂少量混
- 8 10YR2/1 黒色砂泥、粘質土
- 9 10YR2/2 黒褐色砂泥、
φ5~10cm礫多量・土器微量混
- 10 10YR4/6 褐色砂泥、φ5~10cm礫多量混
- 11 2.5Y3/3 オリーブ褐色砂泥、φ5~10cm礫多量
- 12 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、φ5~10cm礫多量

掘形



図18 井戸22実測図 (1:20)

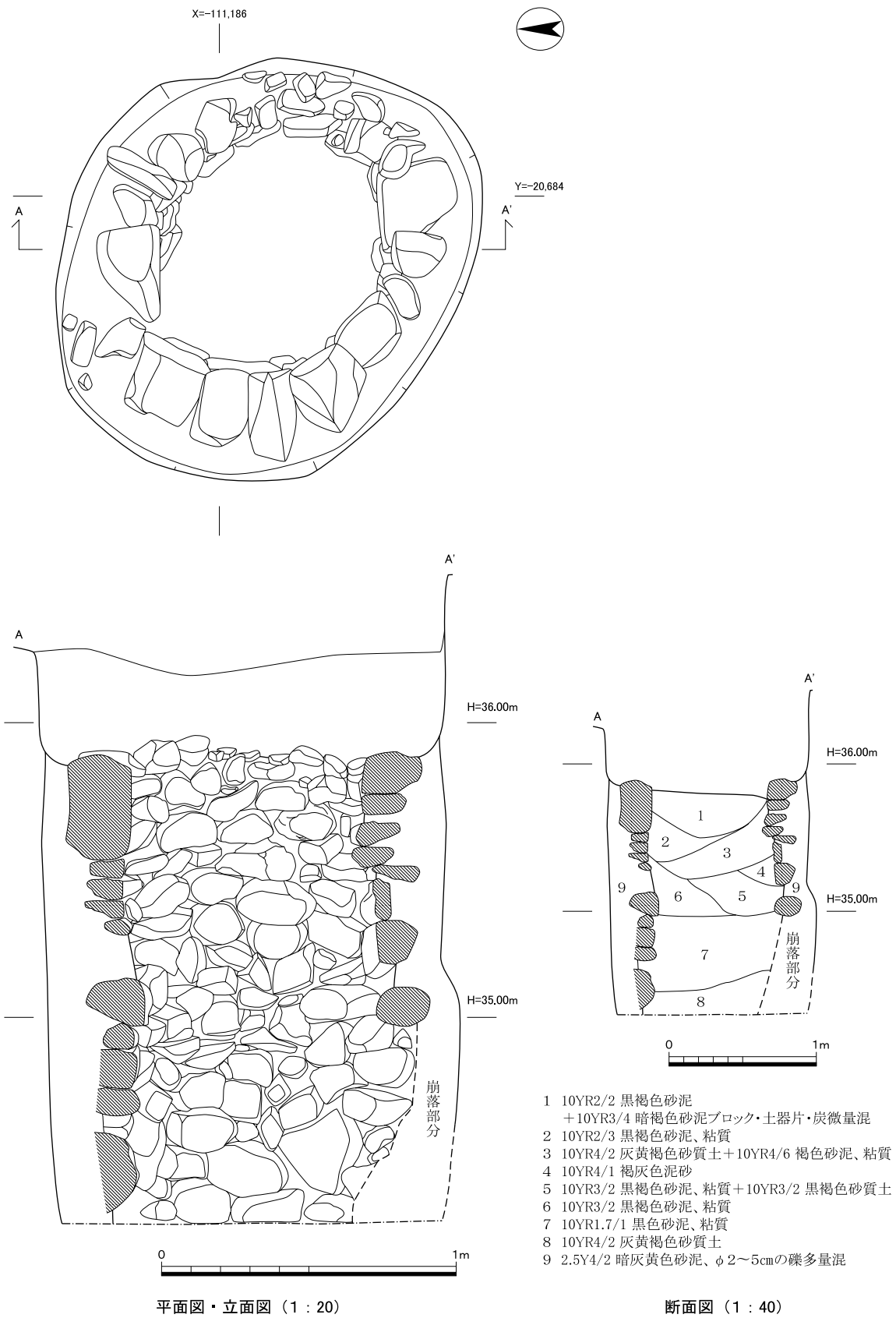


図19 井戸24実測図 (1 : 20、1 : 40)



図20 1区3期遺構平面図 [平安時代] (1 : 150)

石据える。西側は柱穴6に削られる。

井戸22(図18、図版2-3) 調査区中央東側で検出した井戸で、最下段の木組の部分で遺存する。掘形は直径1.1mの円形で、径5~10cmの礫が詰まる。木組は、長さ60cm・幅8cm・厚さ4cmの板を方形に組む。南側は掘形、横板とも攪乱で削平される。埋土から室町時代後期の土器が出土した。

井戸24(図19、図版2-4) 井戸22の東側で検出した石組井戸である。掘形の平面形は東西1.4m、南北1.45mのほぼ円形で、掘形に径2~5cmの小礫が多量に混じる。石組は0.2~0.4mの石材を小口積みにして垂直に組み上げる。1.6mまで掘り下げたところで掘形が崩落したため、底部まで掘り下げられなかった。埋土から土師器や瓦器羽釜の小片が出土した。

土坑23 井戸22の南で検出した。東西1.3m、南北1.4m、深さ0.45mのほぼ円形の土坑である。井戸の可能性はある。埋土は黒色粘質土で室町時代後期の土器と弥生時代後期の土器片が混入して出土した。

土坑70 調査区北側で検出した土坑で東西1.0~1.4m、南北1.8mある。平面形は中程でくびれる瓢箪形である。深さ0.3~0.4mと北に深くなり、調査区北に延長する。埋土は暗灰黄色砂泥で室町時代の土師器の他に瓦器や中国産の青磁などがある。東播系須恵器の鉢が混入して出土した。

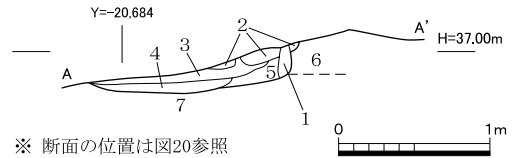
他に調査区北側で検出した土坑67・68がある。いずれも室町時代の土器が出土した。南東部では円形の土坑77・78・79が重なり合った状態で検出した。出土遺物が小片で、性格は不明である。

3) 3期(平安時代)の遺構(図20)

溝72(図21、図版3-1) 中央東寄りで検出した南北方向の溝である。検出規模は長さ2.8m、幅1.4m、深さ0.2mある。南は土坑1に削られ、北は調査区外に延長する。埋土から平安時代中期の土器が出土した。

4) 4期(弥生時代)の遺構(図22)

流路74・75(図23、図版3-2・4-1) 溝72の下面で検出した南北方向の流路である。流路74は検出規模は長さ8.0m、幅が8.6m、深さ0.5mある。南北ともに調査区外に延長し、西側は土坑1に、東側は校舎基礎掘形に削られる。21・23層から弥生時代後期の土器が出土した。流路74の西肩付近の底部で杭跡を3箇所検出した。北壁の断面観察から、流路74の西肩に人為的に土(25・26・29層)を施して護岸が造られていることが判明した。また流路74の埋土上面に、流路75がある。遺物はなく時期は不明である。21層で出土した土器は23・24層に包含していたものである。



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土、粗砂~中砂混
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、粘質、粗砂+10YR8/4 浅黄色粘土ブロック少量混
- 3 2.5Y3/2 黒褐色砂泥粘質土+10YR5/3 にぶい黄褐色粘土、土師片多量混、固く締まる
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土+10YR2/1 黒色粘土混、固く締まる
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土+10YR2/1 黒色粘土混、粗砂中量混、固く締まる
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土、粗砂少量混(溝72西肩)
- 7 10YR2/1 黒色粘土(流路74)

図21 溝72断面図(1:50)



图22 1区4期遺構平面図 [弥生時代後期] (1 : 150)

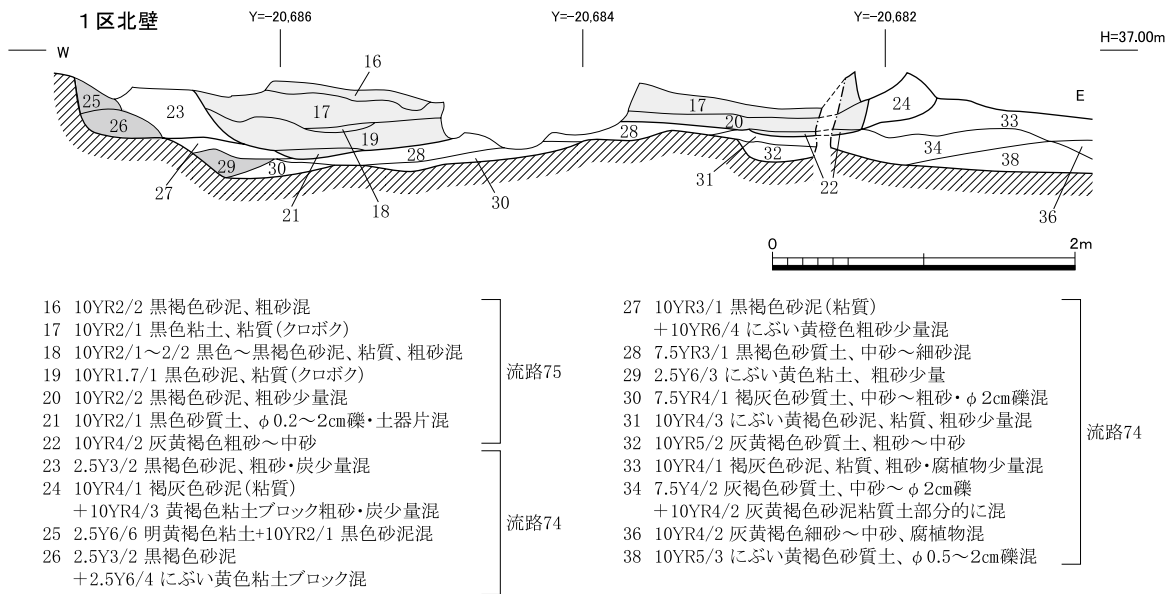


図23 流路74・75断面図(1:50)

(4) 2区の遺構(図24～29、図版4・5)

1) 1期(江戸時代)の遺構(図24)

柱穴列、柱穴などを検出した。

柱穴列1(図25) 調査区南半中央で検出した東西3間の柱穴列である。柱間1.1mあり、柱穴543には径5～10cmの根石が、柱穴547には礎石を据える。方位は東で南に振れる。

柱穴列2(図25) 調査区南西部で検出した東西2間の柱穴列である。柱間2.0mあり、方位は東で北に振れる。

2) 2期(室町時代)の遺構(図26)

溝・土橋・柱穴・土坑などを検出した。溝は3条ある。柱穴は調査区西半で検出した。礎石を据えるものもあるが、並ぶものがなく建物は復元できない。

溝511(図11) 調査区南端中央で検出した。幅1.5m、深さ0.6mあり、南壁から0.3m北のところで攪乱を受け、途切れる。南は調査区外に延長する。断面はV字形で、暗灰黄色粘質土の埋土から土器の細片が出土した。

溝541 2011年度調査で検出した溝99の南肩にあたる。埋土から室町時代後期の土器が出土した。

溝513(図11・27、図版5-1・5-2) 調査区中央東寄りで検出した南北方向の溝である。検出長9.0m、幅2.0～2.5m、深さ0.85～1.0mある。北は講堂コンクリート基礎の掘形により攪乱を受けているが、2011年度調査で検出した土坑20に繋がる。南は調査区外に延長する。埋土から多量の瓦とともに五輪塔の一部や石仏、室町時代後期後半の土器が出土した。

土橋572(図27・28、図版5-1・5-2) 溝513に造られた土橋である。溝に直交するよう



図24 2区1期遺構平面図 [江戸時代] (1 : 150)

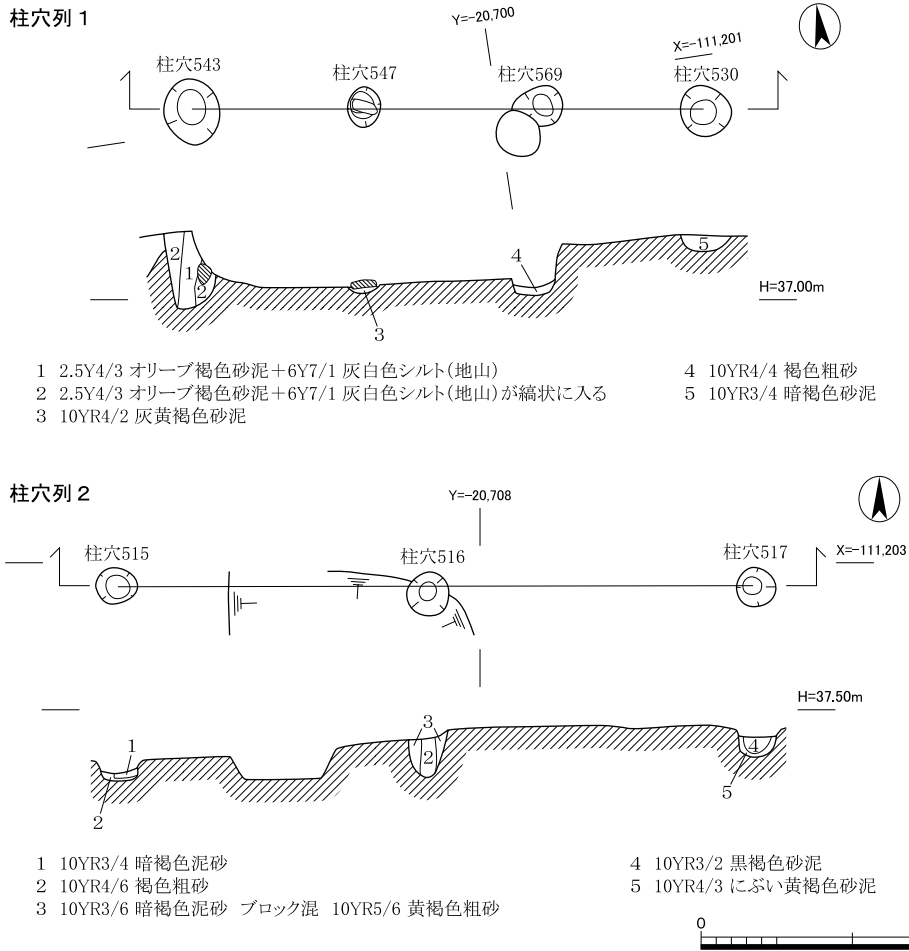


図25 柱穴列1・2実測図(1:50)

に南北2列に石を積み上げ、その内側に土を入れて造成している。規模は長さ2.1m、幅2.0mあり、60~70cmある大きな石の他、五輪塔の一部が石材として使用されている。構築方法はまず、基礎になる大きな石を溝の底に並べて据え、隙間に小礫を入れて固定する。さらに一回り小さな石を積み上げる。肩口の部分は溝の肩を掘り込んで据えている。北側列の基部には高さ75cmもある石を縦に据えている。このようにして両側の2列積み終えたら、その間に土を入れて土橋を構築し通路とする。構築土から室町時代後期後半の土師器が出土した。

土坑508 調査区西端で検出した土坑である。平面形は北が径0.8mの円形と東西0.8m以上ある楕円を繋げた瓢箪形で、南北3.0m、深さ0.5mある。西は建物基礎に削平される。埋土から鎌倉時代後半から室町時代前期の遺物が出土した。特に瓦器鍋釜が多い。西側は2011年度調査区で室町時代の整地層や南北方向の溝134を検出しており、その中から臍骨器として使われた瓦器鍋釜が多量に出土している。

土坑545 土坑508の北東で検出した東西0.7m、南北0.7m以上、深さ0.3mあるほぼ円形の土坑である。北は建物基礎に削平される。埋土は暗褐色砂質土で鎌倉時代後半から室町時代前期の遺物が出土した。

土坑509 調査区南半西寄りで検出した東西1.0m、南北1.5~2.0m、深さ0.2mある不定形の土

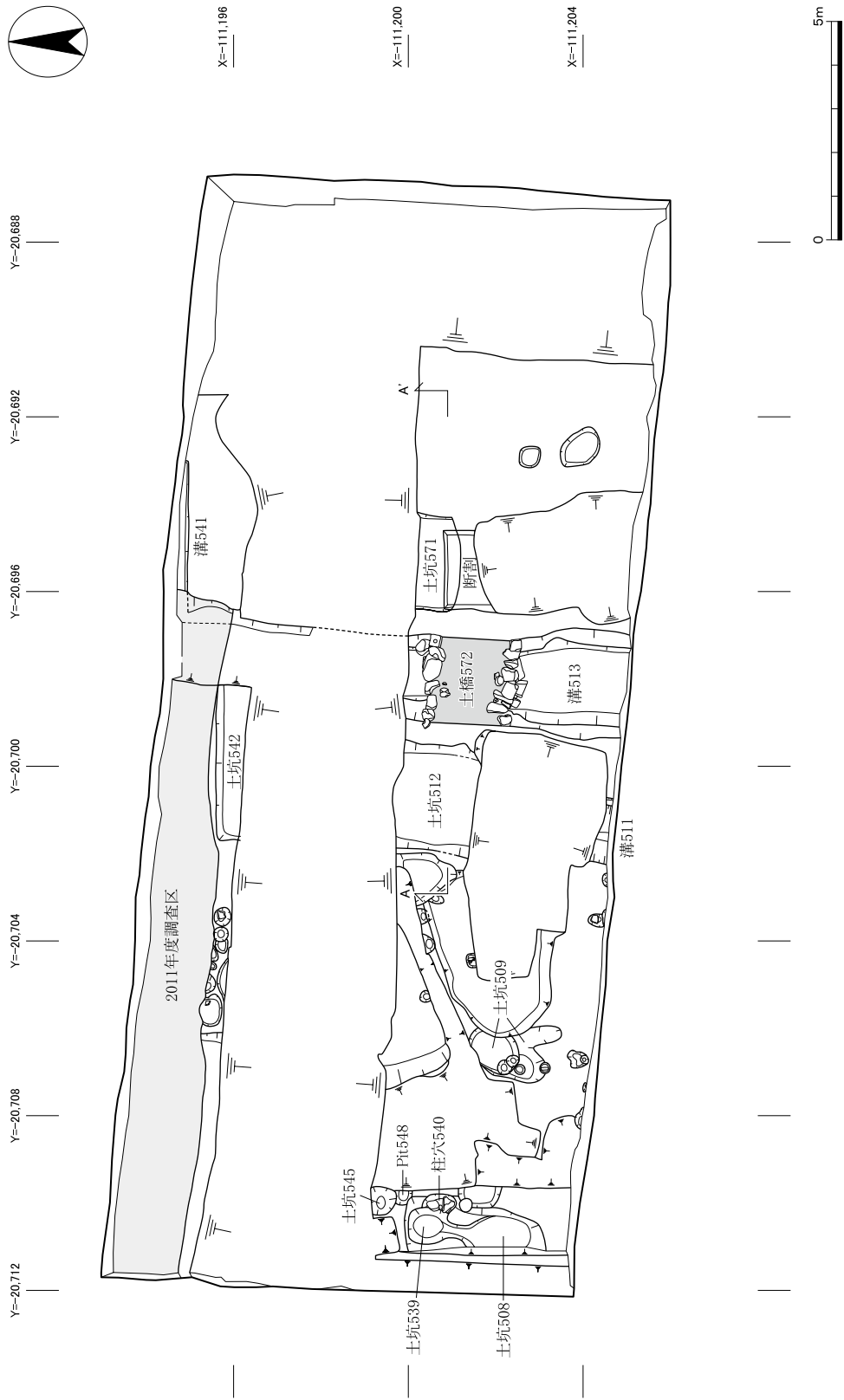
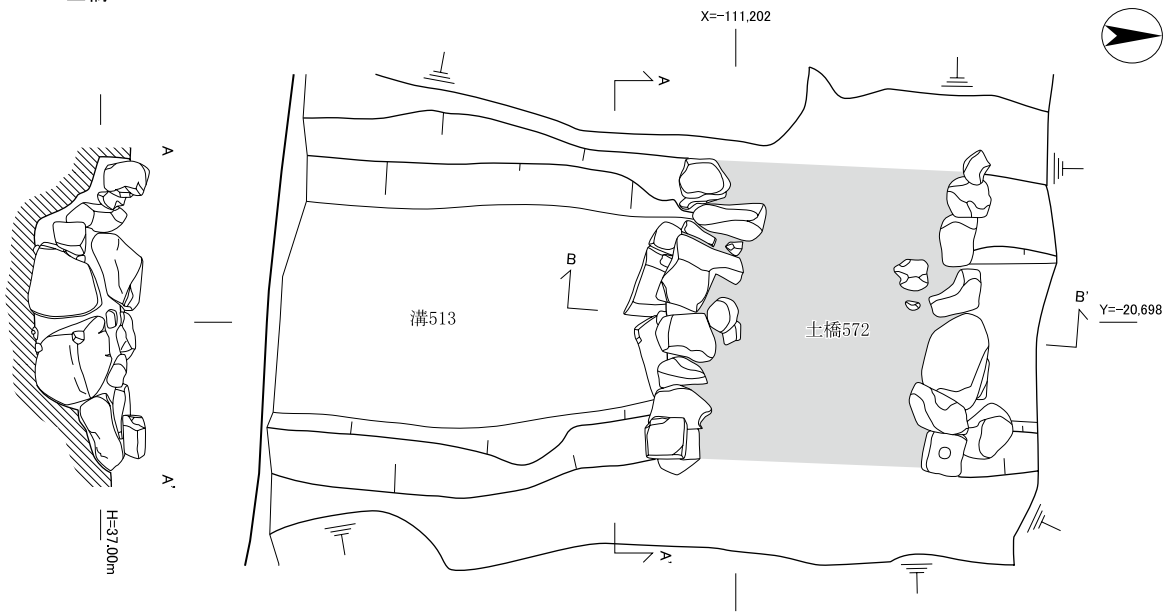


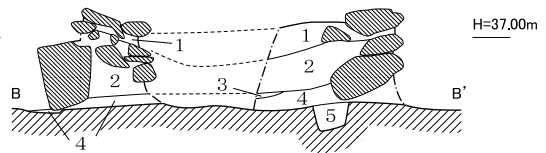
図26 2区2期遺構平面図 [室町時代] (1:150)

土橋572



- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
+5Y6/2 灰オリーブ色シルト上部に混
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
+2.5Y6/4 にぶい黄褐色粘土ブロック中量混
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土
+2.5Y6/2 灰黄色シルトブロック少量混
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土

土橋572構築土



溝513

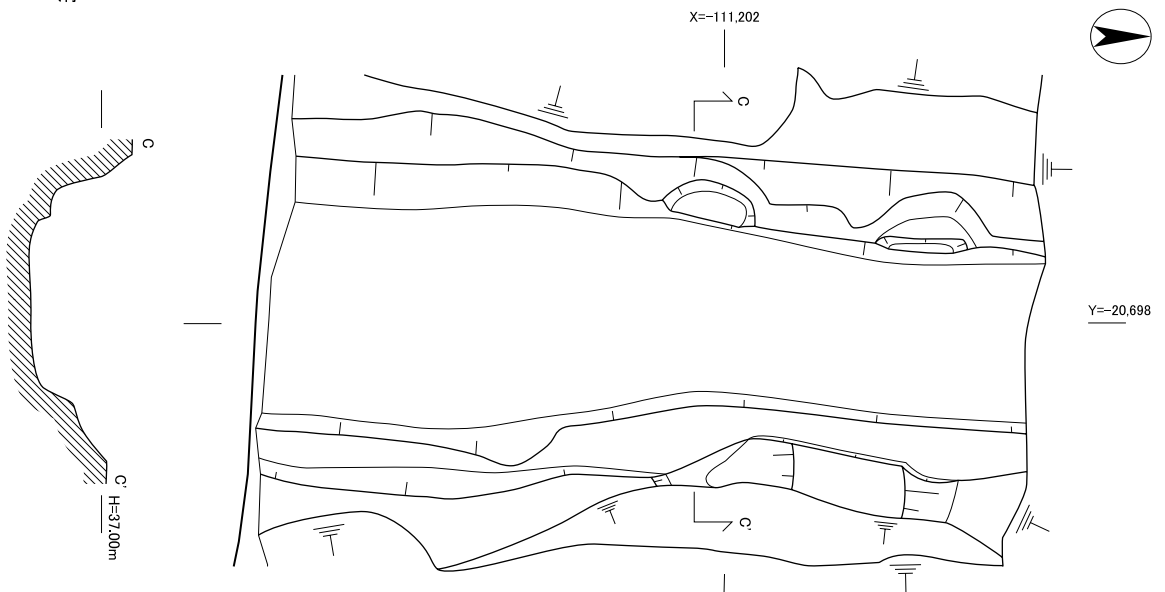


図27 土橋572・溝513実測図 (1 : 50)

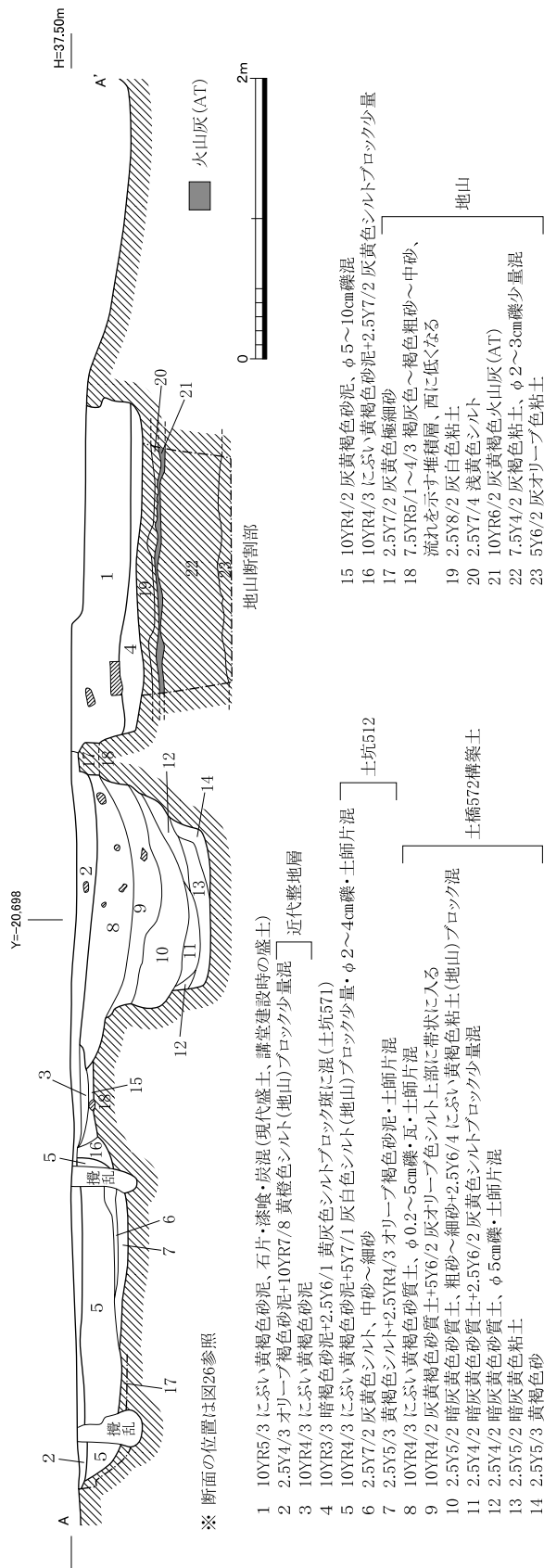


図28 東西セクション断面図 (1:50)

坑である。北は埋設管、東は攪乱に削平される。炭混じりの黒褐色砂泥と暗褐色砂質土からなる埋土で室町時代前期の遺物が出土した。下面では柱穴を3基検出した。

土坑542 建物基礎北側で検出した土坑である。東西3.5m、南北0.7m、深さ0.3mあり、南は建物基礎に削平される。灰黄褐色砂泥の埋土から後述する土坑512より古い室町時代後期前半の遺物が出土している

土坑512 (図28) 溝513の西側で検出した土坑である。東西2.4m、南北1.9m、深さ0.4mあり、北は建物基礎に、南は攪乱に削平され、南壁に延長せず途中で途切れる。埋土から室町時代後期後半の遺物が出土した。出土遺物は土坑542より新しいが、西端の南北ラインが土坑542と揃うことから同一の遺構で北門から土橋に続く通路地業の可能性がある。

土坑571 (図28) 溝513の東側で検出した土坑である。東西2.2m、南北1.0m、深さ0.1~0.2mあり、北は建物基礎に、南と上部は攪乱に削平される。埋土から室町時代後期後半の遺物とともに鎌倉時代初頭の泥塔の一部（火輪）が混入して出土した。

柱穴540 (図29) 調査区南西で検出した。

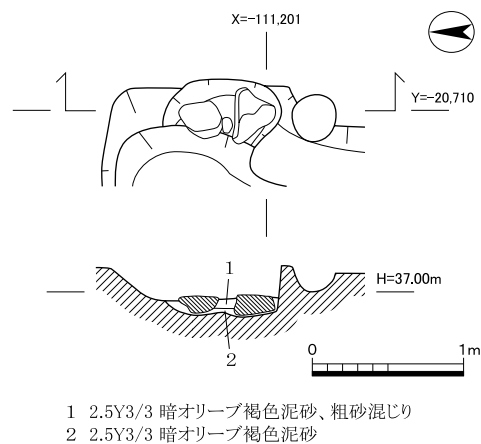


図29 柱穴540実測図 (1:50)

検出面で径0.8m、深さ0.2mある柱穴で、西側は土坑508に削平される。底部に礎石が2石並んで据えられている。

(5) 火山灰層の調査

1区・2区の地山層下で始良火山灰(AT)を検出した。

1区 調査区西部で始良火山灰(AT)(図9-41層)を検出した。検出面の標高は37.1mで、5~20cmの厚さで堆積する。火山灰層は西半全体にわたり、ほぼ水平に堆積する。東半は攪乱や遺構で削平される。土坑1の北壁を利用して火山灰採取を行った(付章1の130813-1地点)。また、調査の最終段階で調査区北壁沿いを断ち割って(図22、図版4-2)、火山灰(AT)の下層の調査を行った。

2区 調査区中央以東で始良火山灰(AT)(図28-21層)を検出した。検出面の標高は36.9mで、火山灰が2~5cmの厚さで堆積する。西側では攪乱や砂の堆積層で削平される。攪乱518の西壁を利用して火山灰採取を行い(付章1の130813-2地点)、調査の最終段階で土坑571の南側で下層を断割り調査(図26・28)を行い、火山灰の堆積状況を観察した。

なお、火山灰の分析結果は付章1を参照。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

弥生時代から明治初頭に至る遺物が整理箱にして48箱出土した。内容は土器類、瓦類、金属製品、骨製品、土製品、石製品などがある。その大半は土器類で、石製品、瓦類と続く。時代別では江戸時代から明治初頭の土器類が大半を占める。次いで室町時代の土器類が多く、鎌倉時代、平安時代、弥生時代の遺物は少量である。

弥生時代の遺物には、弥生土器の甕、器台などがある。平安時代の遺物には、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。弥生時代や平安時代の遺物は、遺構に伴うものの他に、新しい時代の遺構に混入して出土したものがある。

鎌倉時代の遺物には、1区北西部の整地層から出土した土師器や、他に2区の室町時代の土坑から混入して出土した泥塔がある。

室町時代の遺物には、土師器、瓦器、輸入磁器、焼締陶器、国産施釉陶器、金属製品・銭貨、石製品・石造五輪塔・石仏などがある。土器類は小片が多く、完形品は少ない。溝、土坑、柱穴、整地層などから出土した。瓦類と石造物の大半は溝513から出土したものである。

江戸時代から明治初頭の遺物には、土師器、土師質土器、染付、青磁、施釉陶器、焼締陶器、金属製品・鉄釘・銭貨、土製品、窯道具、埴塼などがある。大半が江戸時代の土坑から出土した。窯

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器7点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器		土師器14点、緑釉陶器1点、灰釉陶器2点、		
鎌倉時代～室町時代前期	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、土製品、石製品		土師器21点、須恵器3点、瓦器15点、焼締陶器1点、施釉陶器1点、輸入磁器1点、瓦類3点、金属製品2点、土製品3点、石製品3点		
室町時代後期	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、金属製品、土製品、石製品		土師器30点、瓦器6点、焼締陶器2点、施釉陶器6点、輸入磁器16点、瓦類14点、金属製品4点、銭貨1点、土製品1点、石製品17点		
江戸時代～明治初頭	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、染付、瓦類、金属製品、骨製品、土製品		土師器14点、瓦器1点、焼締陶器1点、施釉陶器22点、染付8点、青磁1点、金属製品1点、銭貨5点、骨製品1点、土製品17点		
明治以降	硯、石筆				
合 計		56箱	245点 (15箱)	1箱	40箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より8箱多くなっている。

道具のトチンは攪乱や現代整地層からも出土している。明治以降の遺物には、石筆・硯がある。ともに六原小学校で教材として使われていたものと考えられ、硯には「六原校」の名が刻まれている。

(2) 土器類

土器類は出土遺物の多くを占める。弥生時代から明治初頭の土器があり、時代別の出土量では、弥生時代、平安時代、鎌倉時代の土器類はごく少量で、室町時代の土器が約30%、江戸時代から明治初頭の土器が約60%を占める。ここでは1区と2区に分けて図示した。1区は弥生時代から明治初頭までの各時代の土器を、2区は鎌倉時代後期から室町時代の土器を報告する。

1) 1区出土土器

弥生時代 (図30、図版6)

流路74から弥生時代後期の土器が出土した。その他に室町時代の土坑や井戸などから混入として出土したものがある。土器は細片が多く、図示できたものは少量である。

流路74 1～3は甕である。1は口縁部がほぼ直角に屈曲し、口縁端部は幅をもち2条の凹線文を施す。調整は磨滅により不明。2は受け口状の口縁部で、口縁部内面は横ナデ調整、外面に櫛状工具による列点文を施す。頸部は縦ハケメ調整、体部外面はハケメ調整ののち頸部直下に櫛状工具による列点文、その下に櫛描直線文を巡らす。いわゆる近江系の甕である。3は内外面にハケメ調整を施す。4は高杯の脚部である。上方に径2mmの小さな穿孔がある。5は器台の口縁部と思われる。口縁部は強く屈曲し、む端部が下に拡張する。端部の上・外に櫛状工具による列点文を施す。6は器台である。脚部下半に4方向の円形の透かしを穿つ。内面下方は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメ調整を施す。

その他遺構 7は甕の底部である。磨滅により調整不明である。室町時代の土坑23に混入して出土した。

流路74

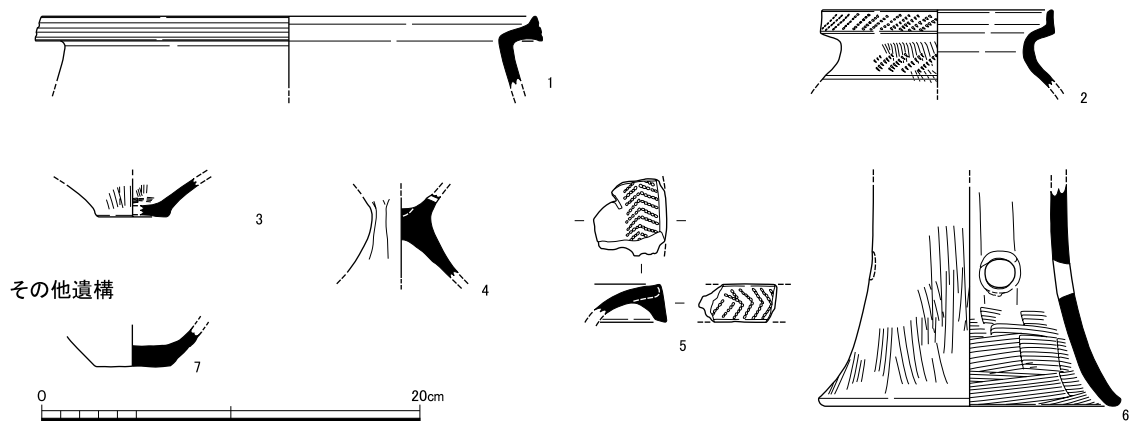


図30 1区出土土器実測図1 [弥生時代後期] (1 : 4)

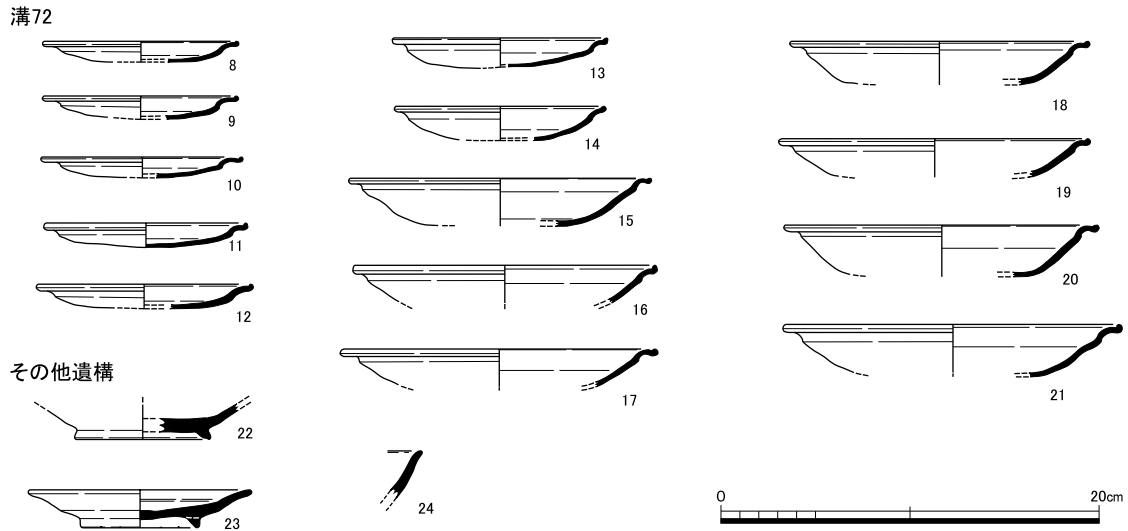


図31 1区出土土器実測図2 [平安時代] (1 : 4)

平安時代 (図31、図版6)

平安時代の遺物は、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。遺構から出土したものと、新しい時代の遺構などから混入として出土したものが少量ある。

溝72 土師器皿や甕の小片が多く、ここで図示できたものは土師器皿(8~21)のみである。皿はすべて、器壁は薄く、口縁端部は丸くおさめるいわゆる「て」の字状口縁をもつ。8~12は口径10.1~11.2cm、高さ1.2cm前後、13・14は口径11.1cm前後、高さ1.7cm前後と口径も器高もやや大きい。15~20は口径16.0cm前後、21は口径17.6cm、高さ1.9~2.7cmある。平安時代中期に属する。

その他遺構 22は緑釉陶器の椀底部で、貼付高台。高台内以外に緑釉を施す。近江産。23は灰釉陶器の段皿で、ロクロ成形。底部外面は糸切り、貼付高台である。ともに土坑1から出土した。24は灰釉陶器の椀口縁部である。室町時代の整地層から出土した。いずれも平安時代中期から後期に属する。

鎌倉時代 (図32)

鎌倉時代の土器は、ごく少数で土師器、須恵器がある。

遺物包含層 25・26は土師器皿である。25は口径9.4cm、高さ1.7cm。26は口径12.6cmあり、2段ナデの名残を残す。いずれも器壁は厚く、口縁端部はつまみ上げる。土坑1の北西、にぶい黄褐色砂泥層から出土した。

北壁8層 27は土師器のミニチュア三足釜で、体部上方から鏝上部に6条の凹線が巡る。鎌倉時代後半に属する。

その他遺構 28は東播系軟質須恵器の鉢である。室町時代の土坑60に混入して出土した。

室町時代 (図32、図版7)

室町時代の土器は、土師器皿の他に瓦器、瀬戸産施釉陶器、中国産磁器がある。遺構から出土したものと、後世の遺構に混入して出土したものがある。

土坑60 29は中国産青磁の香炉で、三角形の足が付く。

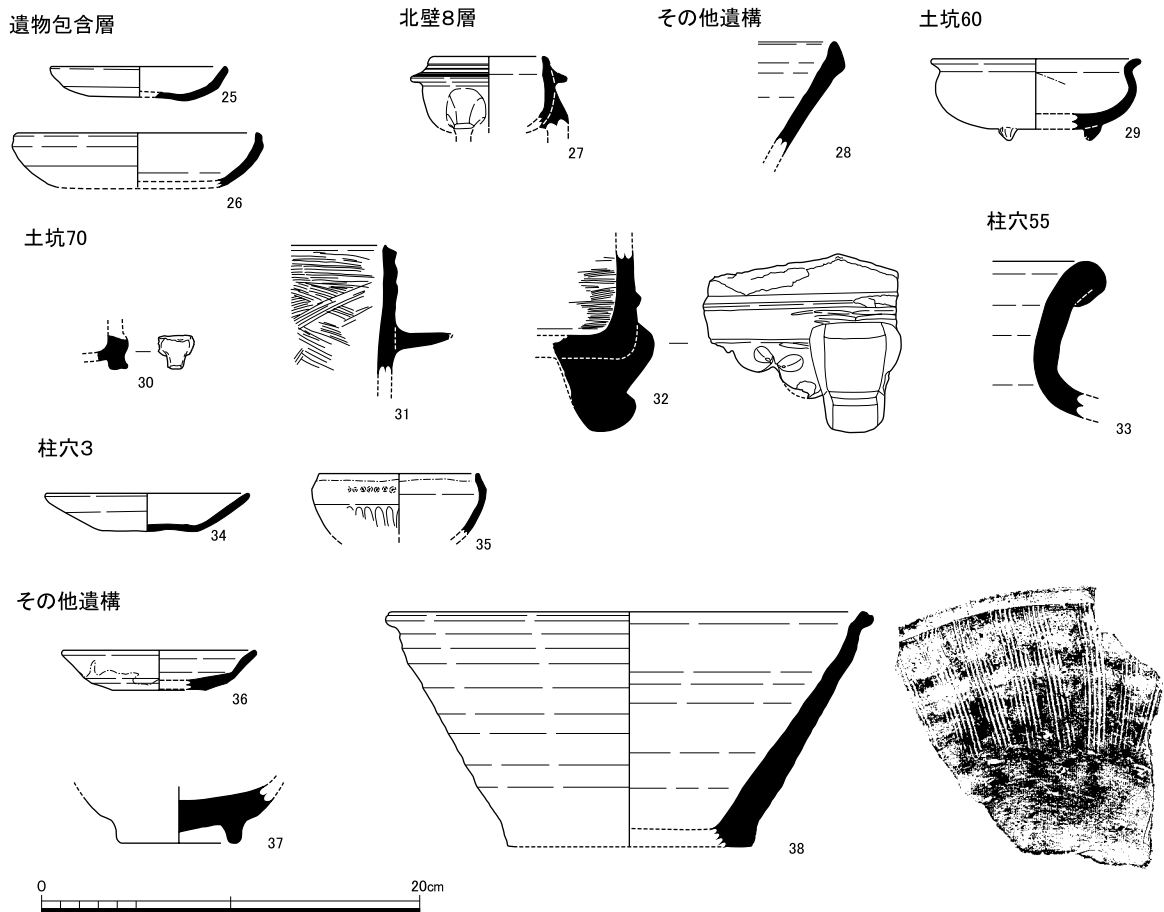


図32 1区出土土器実測図3 [鎌倉時代から室町時代] (1 : 4)

土坑70 30は中国産青磁香炉の底部に付く獣足である。31は瓦器羽釜で、体部上方に幅の広い鏝を付ける。内面は多方向のハケメ、外面は横ナデを施す。32は瓦器火鉢の底部と足である。底部外面に1条の凸線を施し、獣足を取り付ける。

柱穴55 33は備前産焼締陶器甕の口縁部である。口縁端部は折り返され、丸くまとまる。

柱穴3 34は土師器皿で口径10.7cm、高さ2.0cmの中型皿である。室町時代後期後半に属する。35は中国産青白磁の合子身で、体部上方は屈曲して内にすぼまる。外面に型押しの小さな突起とその下に蓮弁を施す。前面に施釉し、口縁部内外面は釉ハギされる。

其他遺構 36は中国産白磁皿でロクロ成形、底部外面はケズリ。攪乱16から混入して出土した。37は中国産青磁碗の底部で削出高台。全面に施釉し、高台内は釉ハギされる。38は信楽産の焼締播鉢で、体部は開き、口縁端部は屈曲する。播目は6本1単位。内面は磨滅する。ともに近代整地層から混入して出土した。

江戸時代から明治初頭 (図33～35、図版7)

土師器、施釉陶器、磁器、染付などがあり、江戸時代前期と後期以降の2時期がある。

土坑2 (図33) 39～41は土師器皿である。39・40は口径10.0cm前後、高さ2.2cmの丸底皿、41は口径10.7cm、高さ2.2cmある。42は土師器鍋の口縁部である。口縁部は外反し、端部は内側につまみ上げる。43は瓦器鍋の口縁部である。口縁部は屈曲して外に広がり、端部は平坦。口縁部は粘

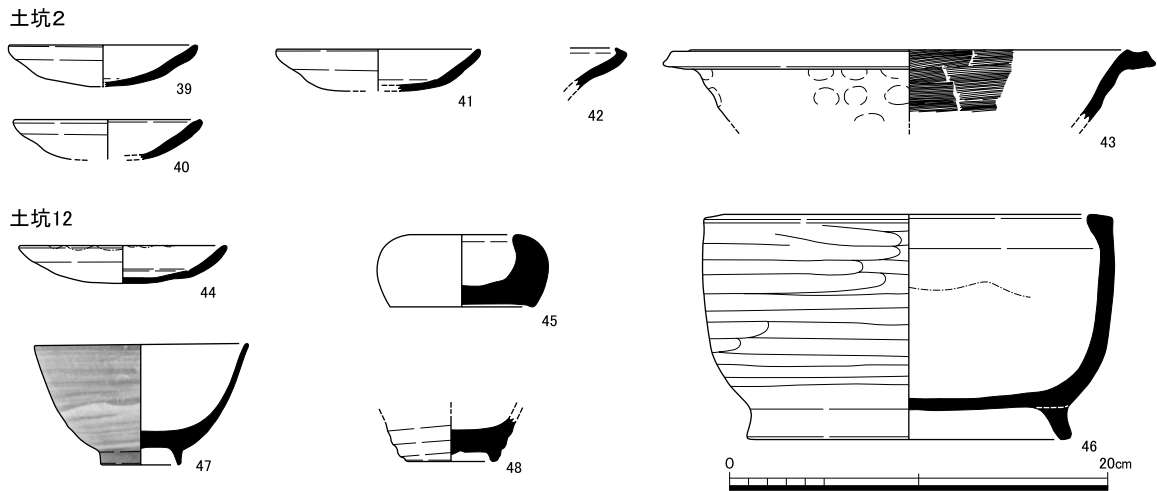


図33 1区出土土器実測図4 [江戸時代] (1:4)

土を継ぎ足す。体部内面は横方向のハケメ、外面は指オサエ。江戸時代前期に属する。

土坑12 (図33) 44は土師器皿で、口径10.8cm、高さ2.0cmあり、底部内面に圈線が付く。口縁部に煤が付着する。45は土師器花塩壺で、底は平坦で器壁が厚い。外面はヘラミガキを施す。46は土師器消壺である。貼付高台で、口縁部上端は平坦である。内面は横ナデ、外面はヘラミガキ。体部内面上方に煤が付着する。47・48は肥前系の施釉陶器椀で、ロクロ成形の削出高台。47は底部内面と高台に砂が付着する。ともに内外面に刷毛目模様をつける。江戸時代後期に属する。

土坑1 (図34・35) 土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付など多量の土器が出土した。土師器には皿 (49～52)・小壺 (53)・塩壺 (54)・涼炉 (55) がある。土師器皿は口径9.5～11.1cm、高さ1.5～1.7cmあり、内面に圈線が付く。49の口縁部に煤が付着する。53は「つぼつぼ」と呼ばれる小壺である。54はロクロ成形の花塩壺である。55は煎茶道で湯を沸かすコンロの一種で、上部は欠損する。施釉陶器には灯火具 (56～64)・土瓶の蓋 (65～68)・小壺 (69)・小椀 (70)・容器蓋 (71)・鉢 (72)・香炉 (73)・花瓶 (74)・尿瓶 (75) がある。56～58は灯明皿である。58は口径15.5cmもある大きなもので、口縁部に線描を施し、菊型を貼り付ける。59～62は灯明皿受けである。62は口径16.0cmあり、58の灯明皿と一对の可能性があり。63は内面に鉄釉を施した小型の「タンコロ」と呼ばれる灯火具である。油を注ぎ、中央の筒に芯を通して使用する。64は把手の付いた「ひょうそく」と呼ばれる灯火具である。65・66は中央につまみが付き、表面にイチチンで模様を描く。65は大型土瓶の蓋である。67は落とし蓋である。表面中央に粘土を折った小さなつまみが付き、表面に鉄釉を施す。68は無釉の急須の蓋である。69は小壺である。ロクロ成形の削出高台で、口縁部に鉄釉、体部内外面に黒釉を施す。70は型押しで造る小椀で、体部外面に唐草と中央に花を配した模様が付く。形が歪んだ粗雑造りである。71は織部の蓋である。平面形は八角形で、方形で四隅を切り落として造る。中央2箇所にあつたつまみは欠損する。一隅に織部釉を施し、表面に鉄釉で梅の花を描く。72は志野の鉢である。体部の中程で立ち上げて、口縁を広げ、四方を内側に折り曲げる。削出高台。口縁部外側に3条の凹線を巡らせ、見込みに草花を描く。73は瀬戸産の大型香炉である。底部は欠損する。型押しで造られ、体部外面には竜と獅子が2方向に付き、獅子

土坑1

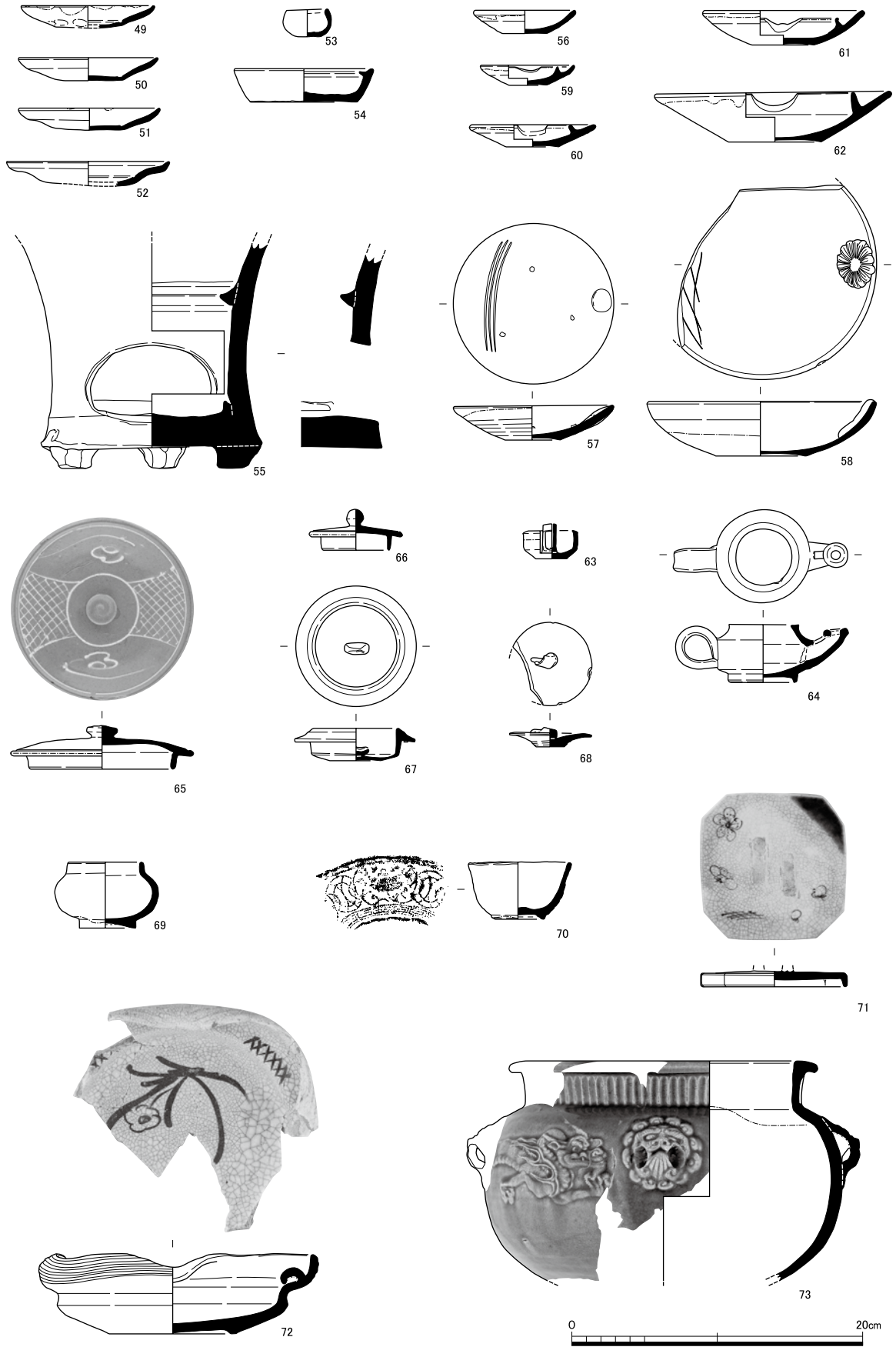


图34 1区出土土器実測図5 [江戸時代後期から明治初頭] (1:4)

土坑1

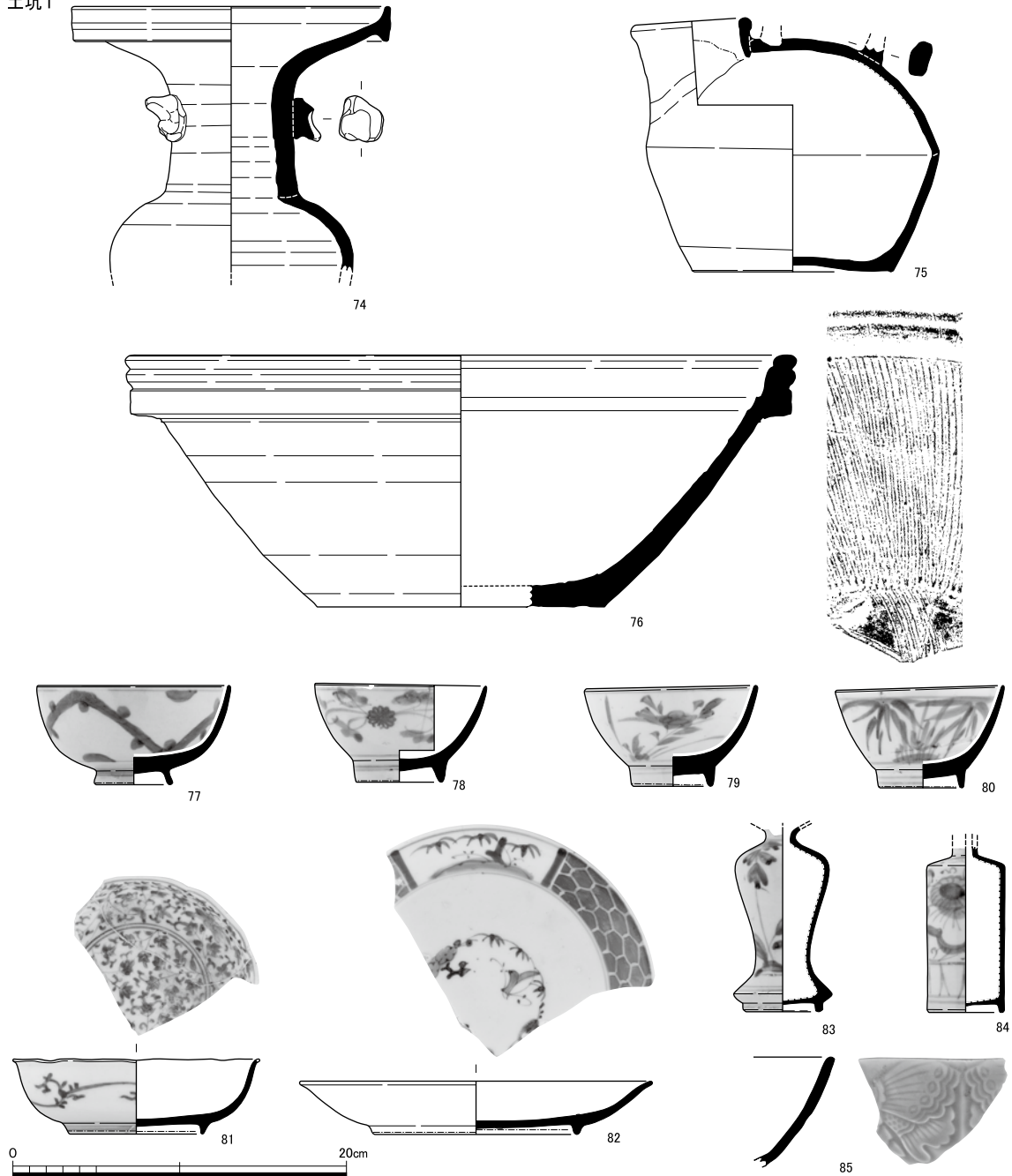


図35 1区出土土器実測図6 [江戸時代後期から明治初頭] (1:4)

の口は紐を通すための穿孔がある。口縁立ち上がり部分は縦方向の削りで模様をつける。口縁部内外面と体部外面に緑釉を、内面は鉄釉を施す。74は大型の花瓶である。体部下半は欠損する。頸部に把手が付く。外面と口縁部・頸部内面に鉄釉を施す。75は平瓶の形をした尿瓶である。把手は欠損する。体部の上半と下半を繋ぎ合わせ上部に口と把手を取り付ける。底部外面に砂が付着する。焼締陶器には堺・明石産の播鉢(76)がある。口径40.2cm、高さ15.0cmある大きなもので、播目は10本単位で底部内面にも播目が付く。国産磁器には染付碗(77~80)・皿(81・82)・御神酒徳利(83)・瓶(84)、青磁の小片(85)がある。77は外面に梅の枝と蕾を蓮弁に見立てて描く。78~80はやや小振りで、高台が高い「くらわんか」碗である。78・79は意匠の違う草花文、80は竹葉文

を描く。81は内面に花唐草、外面に唐草、高台内に「福」を描く。焼継をして、再利用している。82は見込みに松竹梅を配し、周囲に亀甲文や竹などを描く。83・84はともに口縁部が欠損し、草花文を描く。85は平面形六角形の鉢の小片である。外面は型押しで蝶の模様が付く。

2) 2区出土土器

鎌倉時代から室町時代前期 (図36)

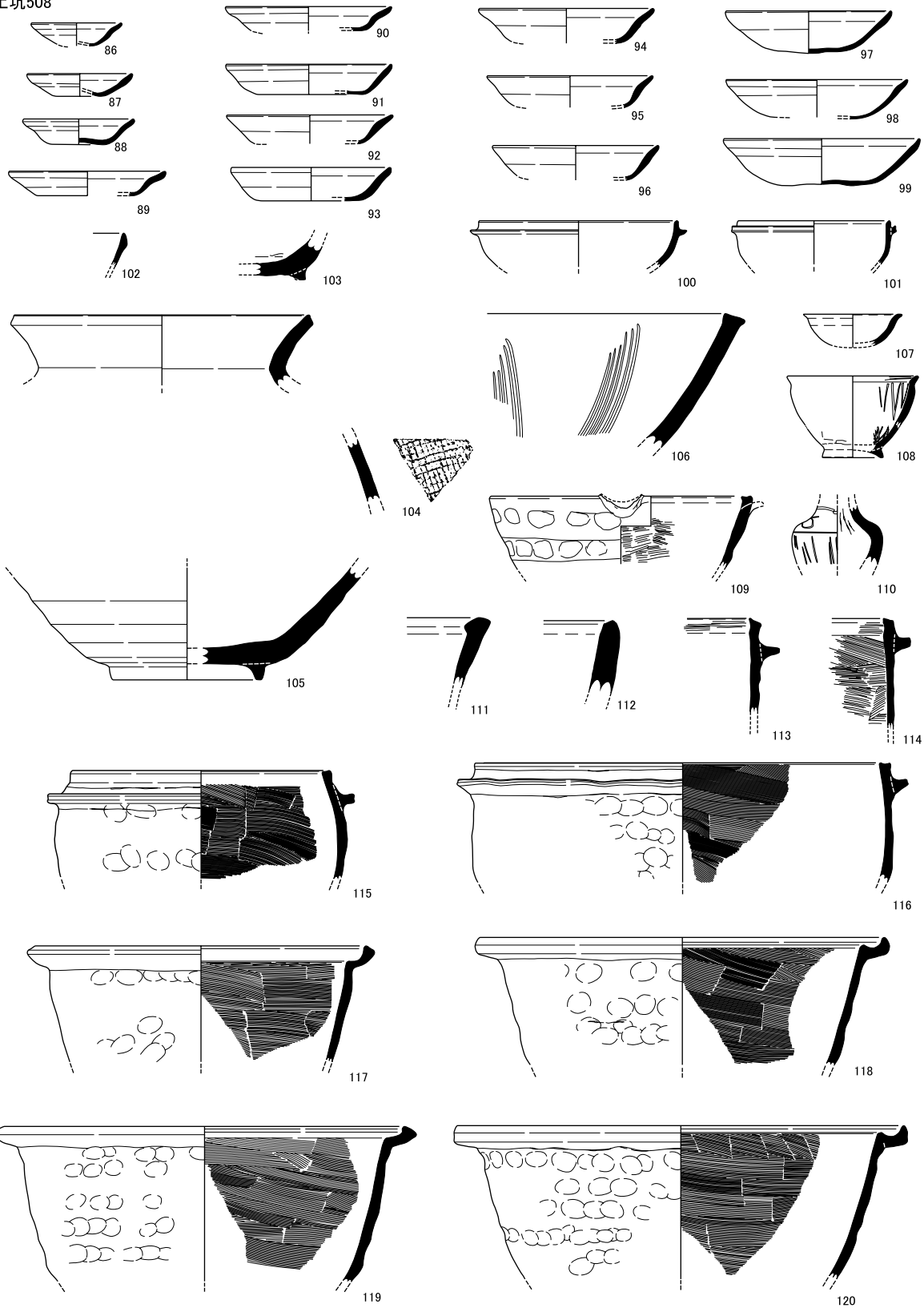
土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、中国産磁器、施釉陶器などがある。土坑508・545・509などから出土したものと新しい時代の遺構などから混入として出土したものがある。

土坑508 土師器皿(86～99)・ミニチュア羽釜(100・101)、中国産白磁碗(102)、施釉陶器壺(103)、須恵器甕(104)・鉢(105)、焼締陶器挿鉢(106)、瓦器皿(107)・碗(108)・鉢(109)・花瓶(110)・盤(111)・火鉢(112)・羽釜(113～116)・鍋(117～120)などがある。鎌倉時代後期から室町時代前期に属する。土師器皿には口径5.9～7.2cm、高さ1.5～1.7cmの手捏ねの白色系小皿(86～88)、口径10.4～10.9cm、高さ2.0cmの赤色系大皿(89～94)、口径10.8～12.9cm、高さ2.8～3.1cmの白色系大皿(97～99)の3群がある。白色系大皿は器高が高く、器壁が薄い。100・101は胎土が精良な土で丁寧な造り。焼成は堅緻である。102は碗の口縁部で、玉縁の断面は三角を呈する。103は瀬戸の鉢の底部で、硯に転用したものか内面が滑らかで墨が付着する。104は東播系の須恵器甕で、口縁部と体部の一部が遺存する。口縁部は粗雑な造りで、体部外面に格子のタタキ調整を施す。105は東海系の須恵器鉢の底部である。体部上方は欠損する。ロクロ成形で貼付高台。体部外面下方はケズリ調整を施す。粗雑な造りで、内面は滑らかで墨が付着する。硯に転用。106は備前産の挿鉢口縁部である。体部から直線的に開いた口縁部の上端は平坦で、挿目は6本単位。107は丸底で、口縁端部は端反りの小皿である。器高は高い。108は天目碗に形状が似た小振りの碗で、貼付高台。外面全面に多方向のミガキ、口縁部内外面は横方向のミガキ調整を、内面に暗文を施す。丁寧な造りである。109は片口が付く鉢で、口縁部上端は平坦。口縁部の一部を外に引っ張り出し、口とする。外面は指痕が残り、内面はハケメ調整。110は花瓶の肩部と体部である。頸部内面はシボリ痕が付く。外面は横ナデのち肩に暗文、体部に縦方向のミガキを施す。111は盤の口縁部、112は火鉢の口縁部で、ともに小片である。113・114は羽釜口縁部の小片で、115は口径17.0cmの小振りの羽釜で、116は口径26.2cmある。ともに底部は欠損する。口縁部上端は平坦、口縁部下方に断面形が方形の鏝を貼り付ける。内面はハケメ調整、外面は指痕が残る。117～120は鍋で、底部は欠損する。117は口径21.8cm、118・119は口径26.5cm、120は口径29.5cmある。口縁部は強く屈曲して、端部は上方につまみ上げる。内面はハケメ調整、外面は指痕が残る。

土坑545 土師器や焼締陶器のみで、図示できる土器は土師器皿(121・122)がある。121は口径11.1cm、高さ2.2cmの赤色系大皿、122は口径11.4cm、高さ2.8cmの白色系大皿である。時期は鎌倉時代後半から室町時代前期に属する。

土坑509 土師器、瓦器、焼締陶器などがある。小片が多く図示できたのは瓦器皿(123)のみである。鎌倉時代後半から室町時代前期に属する。123は口径7.2cm、高さ1.5cmある小皿で、丁寧

土坑508



土坑545



土坑509

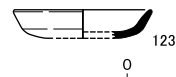


图36 2区出土土器实测图1 [鎌倉時代後半から室町時代前期] (1:4)

な造りである。

室町時代後期 (図37、図版7)

土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、中国産磁器、施釉陶器などがある。溝513・土坑512・542などから出土したものと新しい時代の遺構などから混入として出土したものがある。

土坑542 土師器、施釉陶器、瓦器、中国産磁器などがある。室町時代後期前半に属する。図示した土器には土師器皿(124～129)、施釉陶器椀(130)・皿(131)、中国産白磁椀(132・133)・青磁椀(134)がある。125～126は口径7.1～7.5cm、高さ1.6cm前後の手捏ねの小皿、127～129は口径9.5cm、高さ1.5～2.1cmの赤色系の皿である。130・131は瀬戸の灰釉陶器で、130は椀の口縁部である。131は皿の底部で、削出高台。底部内面は釉ハギされる。132～134は椀の底部。ともに削出高台で、高台は露胎する。132は底部内面に櫛描文を施し、133は底部内面は釉ハギされる。134は外面に蓮弁文を施す。

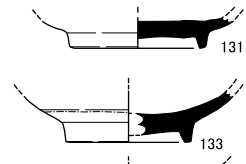
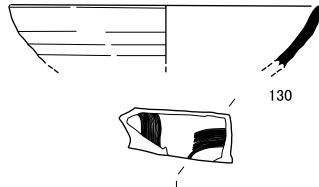
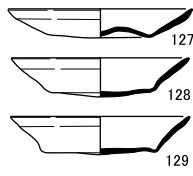
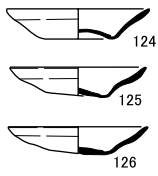
土橋572構築土 土師器、瓦器の小片がある。図示できたのは土師器皿(135・136)のみである。室町時代後期後半に属する。134は口径7.6cm、高さ1.4cmある赤色系の大皿、135は口径13.0cmある白色系の大皿である。

溝513 土師器、施釉陶器、瓦器、中国産磁器などがある。土師器皿が多く、他は少量で小片である。室町時代後期後半に属する。土師器皿(137～157)、施釉陶器皿(158)、中国産白磁椀(159)・染付椀(160)、瓦器火鉢(161)・火鉢の足(162)・羽釜(163)がある。137～139は口径6.0cm、高さ1.0cm前後の小皿、140～147は口径8.5～9.2cm、高さ1.6cm前後の丸底タイプの皿、148～152は口径9.2～9.7cm、高さ1.6～1.8cm前後の中皿、153～157は口径12.0～12.2cm、高さ2.0～2.2cmの大皿の4群がある。158は瀬戸の灰釉卸目皿の底部で、裏面は糸切痕が付く。ヘラ刻みのおろし目が底部内面全面に広がる。159は口縁端部が端反りの白磁椀である。160は中国南方系の染付椀で、削出高台。体部外面と見込みに草文を描き、高台を除く全面に施釉する。161は火鉢口縁部で、口縁部直下に2条の凸帯を巡らせ、凸帯間に桜の花と蕾の模様を押印する。上端は水平な端面をもつ。162は大型火鉢の足である。粘土紐を巻き上げて、内面はヘラオサエ、外面は縦方向のミガキを施す。163は羽釜である。口径24.2cmあり、底部は欠損する。いずれ口縁部上端は平坦、口縁部下方に断面形が三角形の鏝を貼り付ける。内面はハケメ調整、外面は指痕が残る。

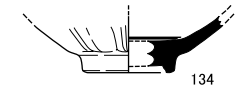
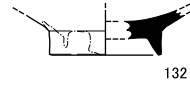
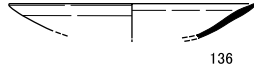
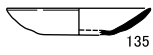
土坑512 土師器、施釉陶器、瓦器、中国産磁器、焼締陶器などがある。土師器は小片のみである。時期は室町時代後期後半に属する。図示できたものは施釉陶器壺(164)、中国産青磁椀(165)・皿(166)がある。164は瀬戸産灰釉壺の底部である。165は龍泉窯系の青磁椀である。166は青磁大皿の底部で削出高台。高台内を除いて全面に施釉する。

その他遺構 新しい時期の遺構から混入して出土した土器である。施釉陶器椀(167)・皿(168)、中国産青磁椀(169)・白磁椀(170)・青磁皿(171)・染付皿(172)、瓦器搗鉢(173)がある。167は瀬戸産灰釉椀、168は大皿である。皿の底部には粗雑な造りの足が付く。169は青磁椀の口縁部で、口縁部は外反し端部は丸く収める。前述の青磁椀(165)と同じ形態である。170は白磁椀、171は青磁皿の底部で削出高台である。ともに高台内を除いて全面に施釉する。172は皿の

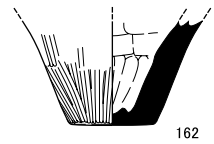
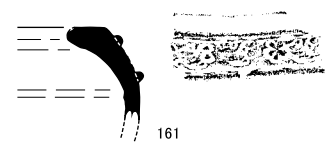
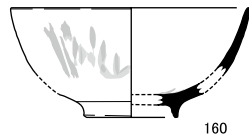
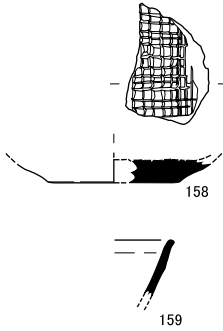
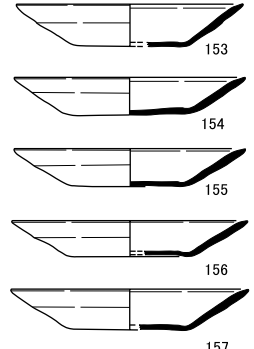
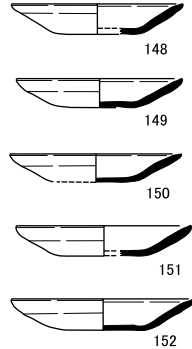
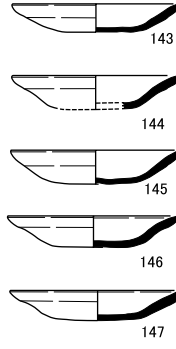
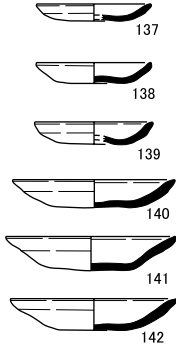
土坑542



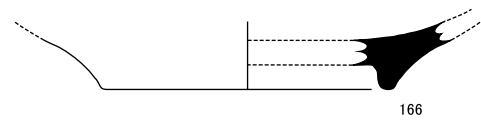
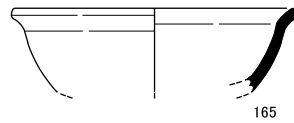
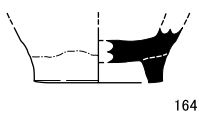
土橋572構築土



溝513



土坑512



その他遺構

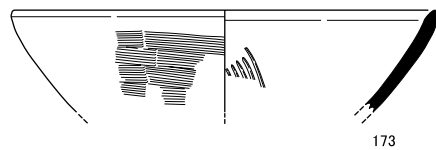
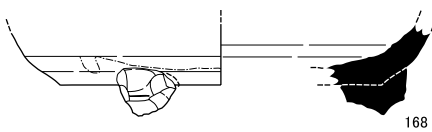
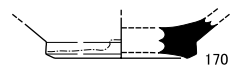
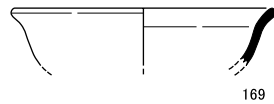
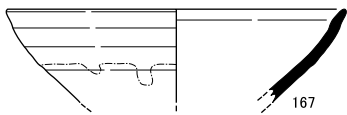


図37 2区出土土器実測図2 [室町時代後期] (1:4)

底部で、削出高台。内外面に幾何学模様を施し、全面に施釉した後、高台を釉ハギする。173は播鉢で、播目は5本残る。口縁端部はつまみ上げる。外面は横方向のハケメ調整を施す。169は柱穴530から、172は攪乱521から、それ以外は近代整地層から出土した。

(3) 瓦類 (図38・39、図版8)

瓦類は整理箱に2箱出土した。大半は室町時代の溝513から出土したもので、平・丸瓦が多く軒瓦は非常に少ない。

軒丸瓦

瓦1 三巴文軒丸瓦。右巻きの巴文を配する。尾は互いに接し、珠文は密に巡る。裏面はオサエ。胎土は砂粒を多量含み、灰色。やや軟質。溝513から出土した。室町時代。

瓦2 巴文軒丸瓦。小片で尾部と珠文のみが残存する。裏面はオサエ、周縁部は横ナデ。瓦当表面に離れ砂付着。胎土は砂粒、小礫を含み、灰白色。硬質。2区の近代整地層から出土した。室町時代。

瓦3 巴文軒丸瓦。外区に珠文が巡る。瓦当裏面に丸瓦を差し込み、粘土を付加して接合した後、オサエ成形で調整する。丸瓦部凸面に鉄線による粘土の切り離し痕がある。土坑12から出土した。室町時代。

軒平瓦

瓦4 剣頭文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部表面と平瓦凹面に布目が付く。瓦当部凸面・裏面はヨコナデ、側面は縦ナデ。胎土は砂粒・小礫少量含み、にぶい橙色。火を受け赤変している。硬質。1区近代整地層から混入して出土した。鎌倉時代。

瓦5 唐草文軒平瓦。瓦当部上部が欠損する。瓦当部裏面・顎部凸面はヨコナデ。胎土は砂粒を含み、灰黄色。軟質。2区近代整地層から出土した。室町時代。

瓦6 唐草文軒平瓦。瓦当部上部が欠損する。中心に上向き五葉を配し、左右に唐草文が展開する。瓦当部裏面・顎部凸面はヨコナデ。胎土は砂粒を含み、灰白色。硬質。溝513から出土した。室町時代。

瓦7 唐草文軒平瓦。中心は一葉が確認できる。左右に唐草文が展開する。瓦当部裏面・顎部凸面はヨコナデ。胎土は砂粒を含み、灰白色。硬質。溝513から出土した。室町時代。

平瓦

瓦8～11 凹面は布目、凸面は斜め格子状のタタキがある。瓦8・11は、端面に「○」の刻印が付く。瓦9・10はタタキの格子が小さい。凸面に離れ砂が付着する。瓦9は土橋572構築土から、瓦8・10・11は溝513から出土した。室町時代に属する。

丸瓦

瓦12～15 瓦12は凹面の玉縁付近に半円形の板状の粘土を取り付けたもので、瓦の滑り留めに使用する。軒先に葺くため軒丸瓦に造ることが多い。瓦13～15は凹面に形態の違う抜き縄痕が付く。瓦13は凸面に縄目が付き、凹面に糸切り痕がある。瓦12・14・15は溝513から、瓦13は土坑

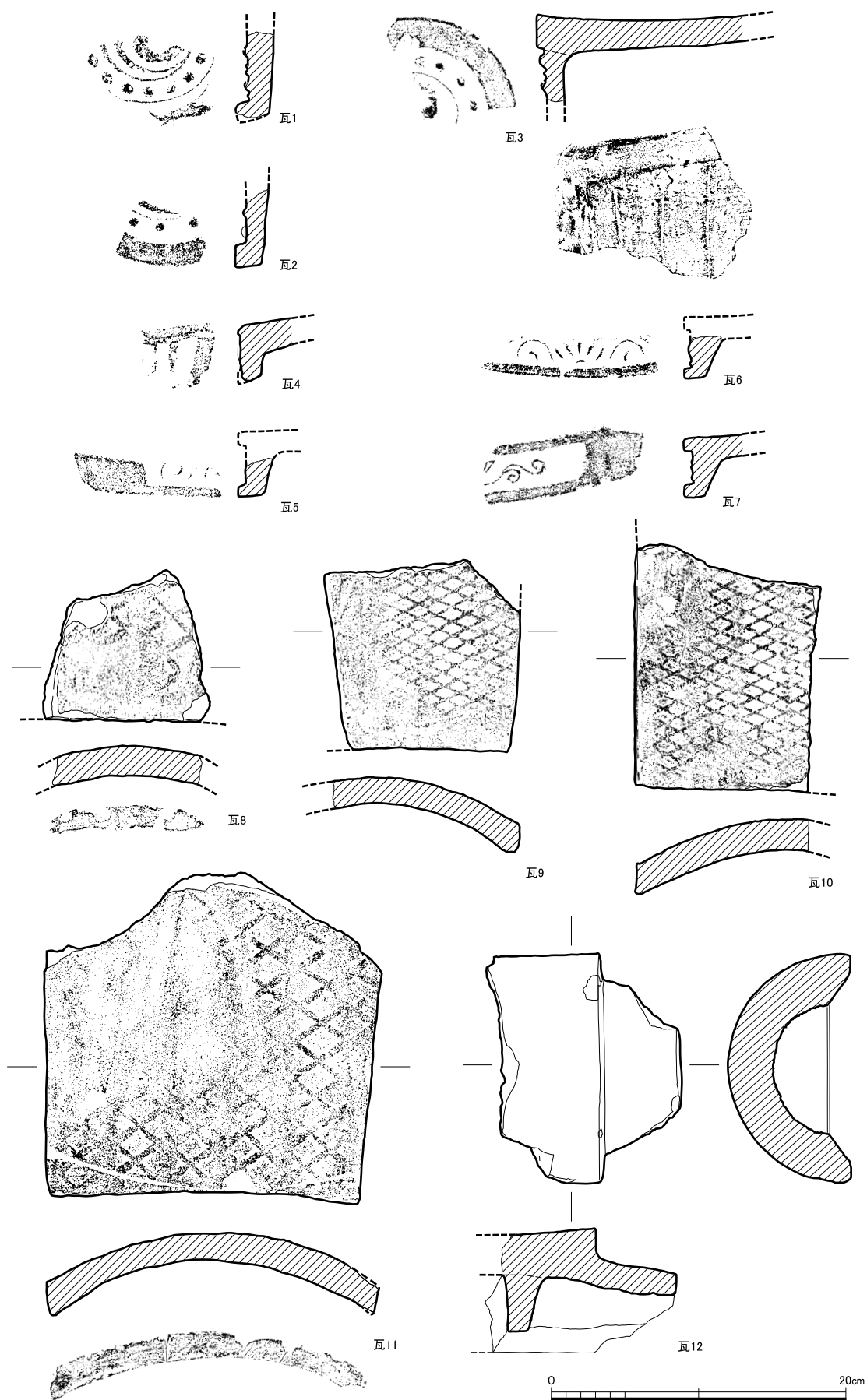


图38 瓦類拓影・実測図1 (1 : 4)

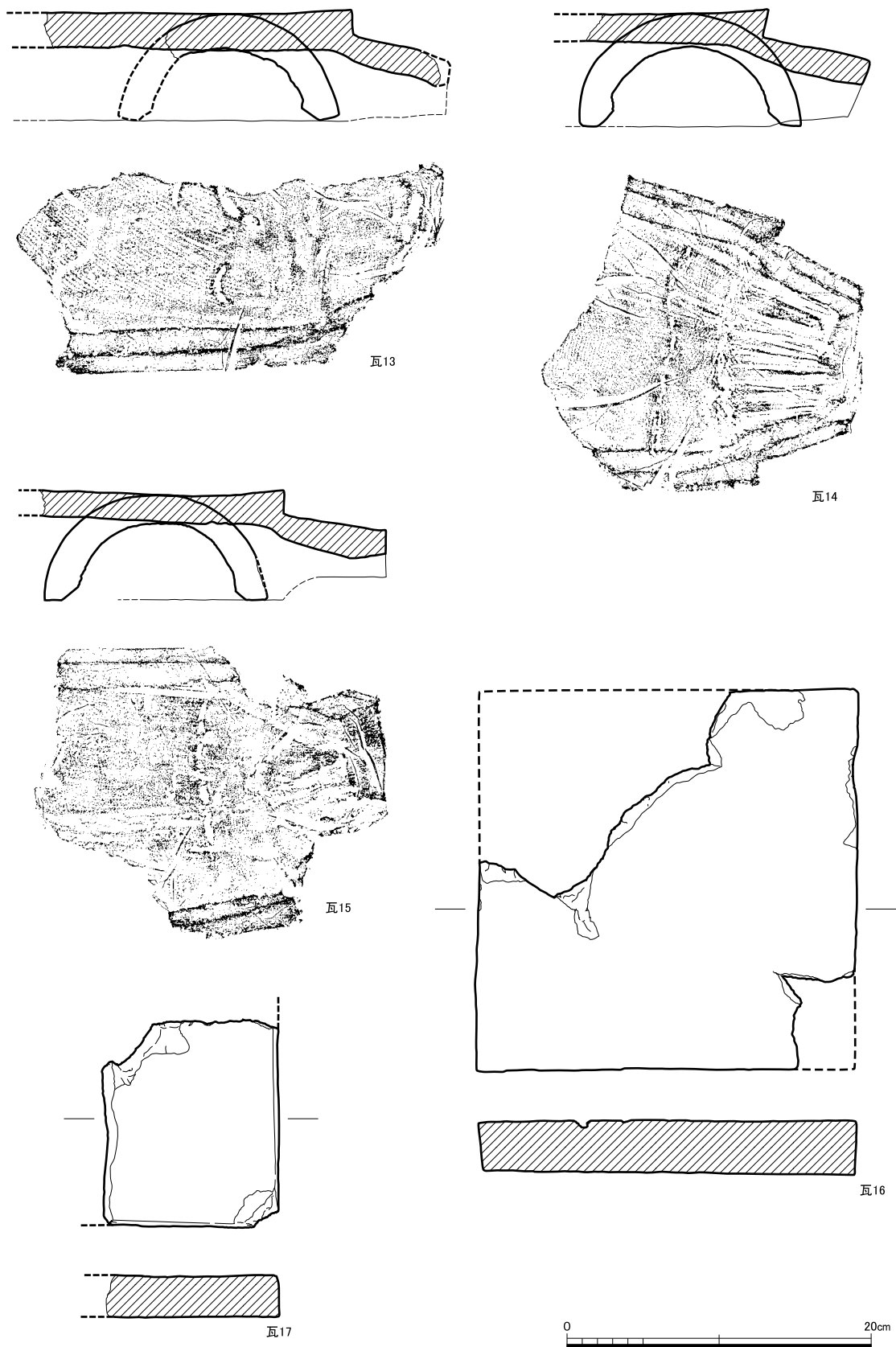


图39 瓦類拓影・実測図2 (1 : 4)

508から出土した。室町時代に属する。

埴

瓦16・17 瓦16は一辺が25cm、厚さ3.5cmある方形の埴である。1区近代整地層から出土した。瓦17は一辺が13cm以上、厚さ2.7cmある。溝513から出土した。室町時代に属する。

(4) 金属製品・骨製品 (図40、図版8)

金属製品には鉄製品、銅製品、銭貨がある。大半は鉄製品の釘で、銅製品は極少量で飾り金具などがある。銭貨も出土枚数は非常に少ない。骨製品には箸がある。

鉄製品

鉄釘 (金1～3) 頭や先端が欠損する。金1は土坑508、金2・3は溝513から出土した。室町時代に属する。

鋸 (金4～6) 金4・5はやや小振りで、半分欠損する。金6は手違い鋸と呼ばれる両端の爪が同一平面上になく、互いに直角方向に向いている鋸で、直交する部材の接合に使用する。金4は土坑508、金5は溝513、金6は土坑512から出土した。室町時代に属する。

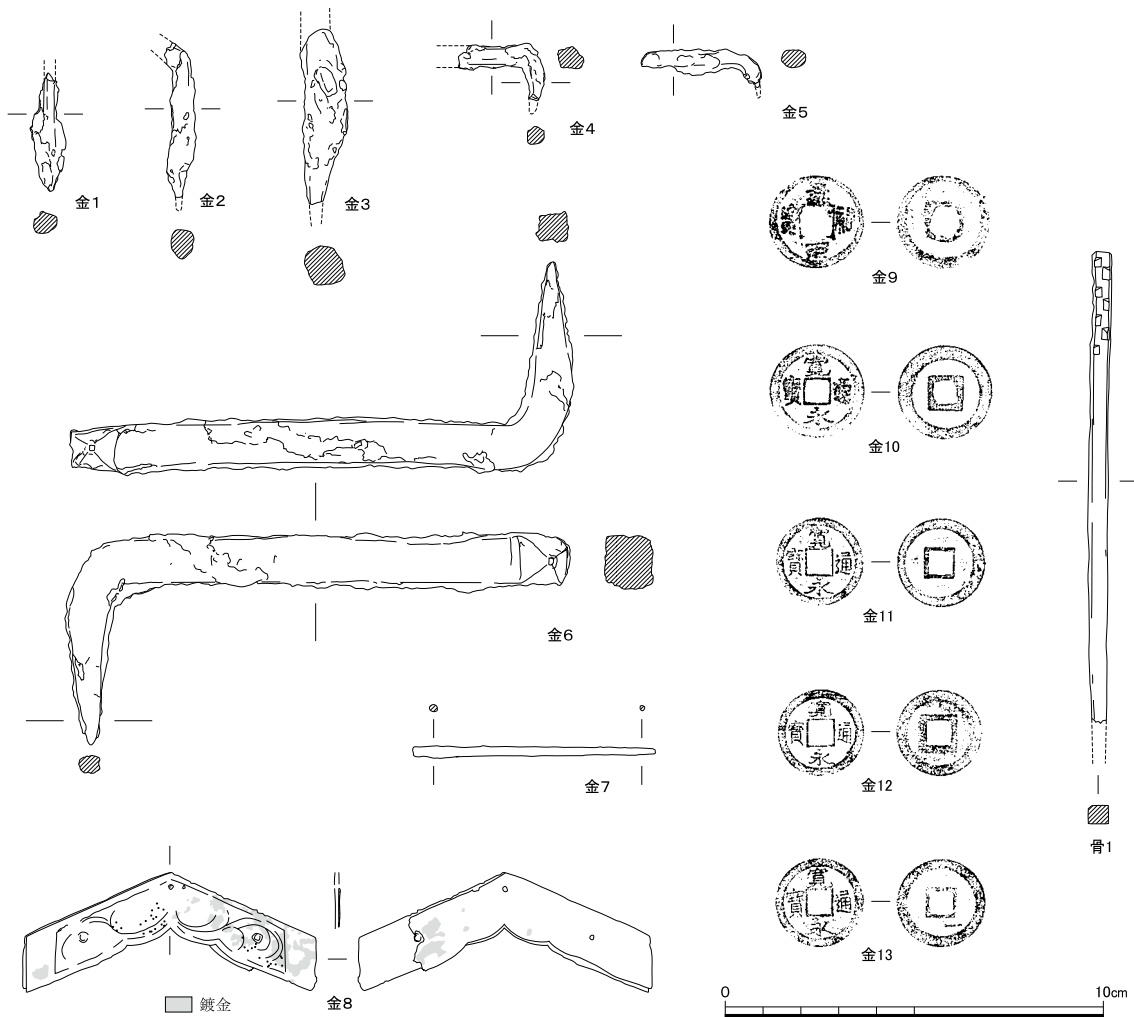


図40 金属製品・骨製品実測図 (1:2)

銅製品

針状製品（金7） 断面円形で細く、先端部が尖る。土坑15から出土した。江戸時代に属する。

飾り金具（金8） 薄い2枚の銅板を合わせて3箇所を小さな鋸で留める。それぞれの表面に唐草文を彫り、渡金を施す。錆で金は剥落している。2区東端の基礎掘形から出土した。

銭貨

景祐元寶（金9） 中国・宗銭で初鑄年は1034年である。土坑76の検出中に混入して出土した。室町時代に属する。

寛永通寶（金10～13） それぞれ字体が違い、金10はやや大きい。金13の裏右下に「一」の刻印がある。金10・11は土坑12、金12・13は1区近代整地層から出土した。江戸時代に属する。

骨製品

箸（骨1） 断面形は方形で、箸先は欠損する。上部の角に方形の刻み模様を入れる。使用した骨の動物は不明である。2区の近代整地層から出土した。江戸時代から明治初頭に属する。

(5) 土製品（図41・42、図版8）

土製品には泥塔や硯、近世の泥面子や玩具の他に、陶器生産に関わる遺物としてトチンやサヤ鉢などの窯道具、鑄造関連遺物の坩堝がある。近世の土製品は主に1区の土坑や2区の近代整地層から出土した。

泥塔（土1・2） 六波羅蜜寺本堂解体修理の際に見つかった多量の泥塔（図41）と同じ泥塔の部分である。土1は手捏ねの五輪塔火輪部で、頭頂にある孔は焼成前に風輪部を上に乗せて細い棒でつないだ痕跡である。土2はその形状から型押しタイプの空・風輪部と考える。ともに胎土は石英や長石の小粒が混じる荒い土である。この土は花崗岩が風化してできた蛙目粘土と呼ばれる土で、東山一帯で採取される。焼成は硬質、胎色はにぶい黄橙色をしている。土1は土坑571、土2は2区南側西寄りの近代整地層から混入して出土した。鎌倉時代初頭に属する。

土製円盤（土3） 瓦を円盤状に加工したもので、径約7.5cm、厚さ2.5cmある。片面は火を受けて赤変し、煤が付着する。溝513から出土した。室町時代に属する。

硯（土4） 須恵質陶器の風字硯の一部である。縁がなく簡素な造りである。裏面滑らかで、使用痕がある。砥石に転用されたものである。1区の整地層から出土した。鎌倉時代に属する。

泥面子（土5～9） 土5は結び文、土6は「二」、土7は花文、土8は人面、9は「寛永通寶」の裏面で一文銭を表す。

玩具（土10～12） 土10はミニチュア施釉椀、土11は釜蓋である。いずれも土坑1から出土した。江

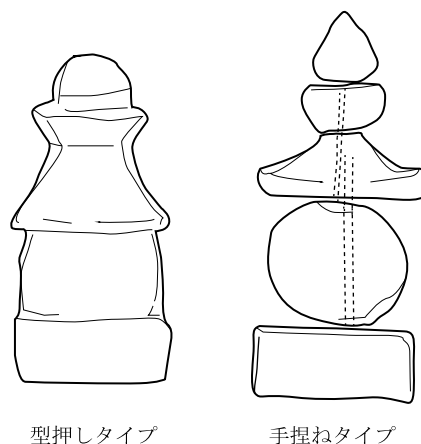


図41 泥塔模式図

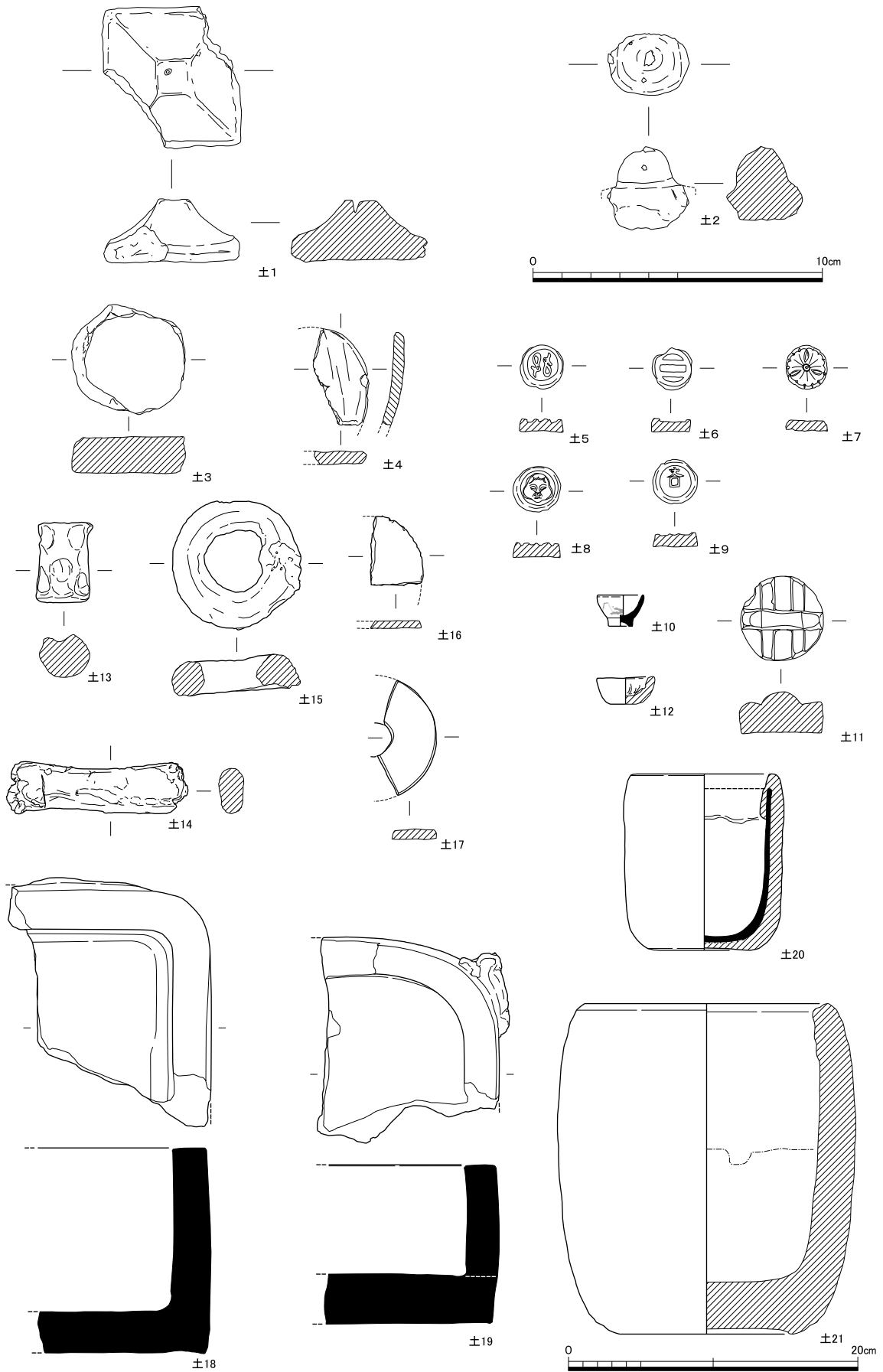


図42 土製品実測図 (1 : 4、1・2は1 : 2)

江戸時代後期から明治初頭に属する。土12は内面に雲母が付着することから玩具の型と考える。土坑1から出土した。江戸時代後期から明治初頭に属する。

トチン（土13～17） 環形を呈するものと棒状のものがある。土13は土坑19、土14～17は2区近代整地層から出土した。江戸時代後期から明治初頭に属する。

サヤ鉢（土18・19） 窯で焼成する際、製品を保護するために使用するもので、いろいろな形態がある。信楽の土で作られており、信楽産の可能性もある。土19は側面や底部に釉着がある。土坑1から出土した。江戸時代後期から明治初頭に属する。

埴塙（土20・土21） 土20は小振りの埴塙で、筒型の陶器を埴塙の芯にしたものである。内部に銅が付着する。21は表面にガラス質の光沢があり、内面に鉄滓が付着する。底部内面には布目が付く。どちらも土坑1から出土した。江戸時代後期から明治初頭に属する。

（6）石製品（図43～45、図版8）

石製品には石鍋・砥石・硯などの生活用品の他に、五輪塔や石仏などの石造物がある。石造物はすべて花崗岩である。

滑石製鍋釜（石1） 体部上方に断面上辺が下がる三角形の鐶を削り出す。外面の鐶上下に工具痕が残る。口縁部上端は平坦に削る。石材は淡赤灰色を呈し、キメは細かい。煤が付着する。土坑508から出土した。

温石（石2） 長方体に加工された温石の一部で、上方に穿孔がある。褐灰色を呈し、細かい雲母が均一に混じりキメは細かく軟らかい。石材は不明である。1区2期遺構検出中に出土した。

硯（石3） 小型の硯である、上部が剥離して陸部が欠損、海部の一部と底部のみ遺存する。石材は灰色の粘板岩。土坑508から出土した。

砥石（石4～7） 石4は下部が欠損する。表裏の両面が滑らかで磨滅している。石材は浅黄色の粘板岩である。1区整地層から出土した。石5は両端が欠損し、表面が滑らかで磨滅し、裏面は剥離している。側面に切断痕が付く。石材は浅黄色の粘板岩である。溝513から出土した。石6は

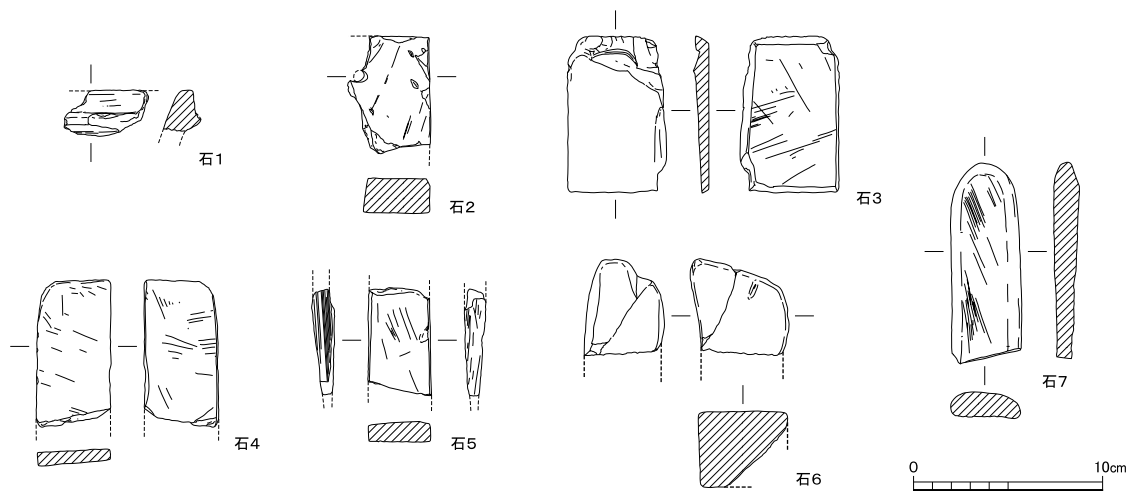


図43 石製品実測図1（1：4）

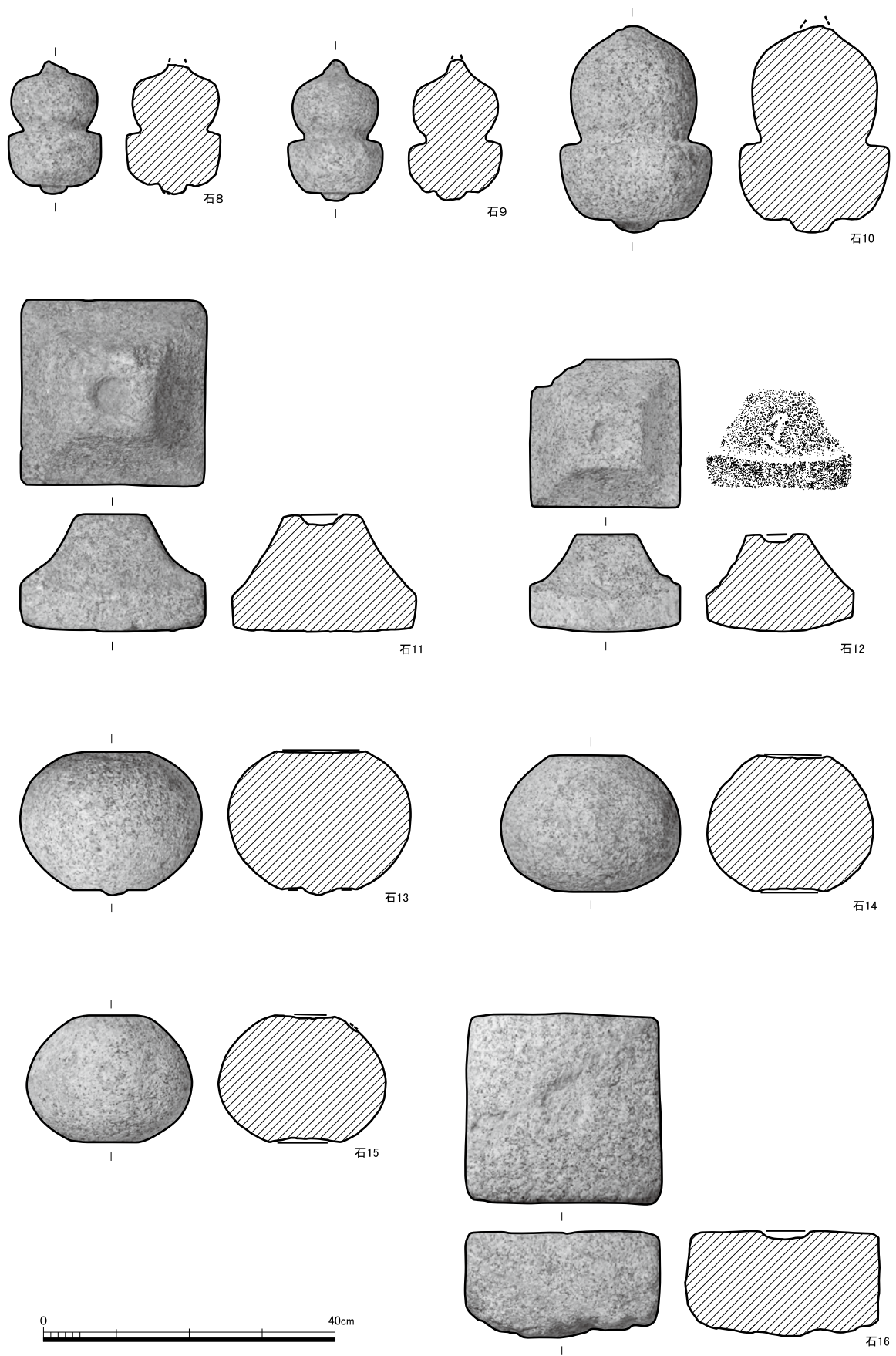


图44 石製品実測図2 (1:8)

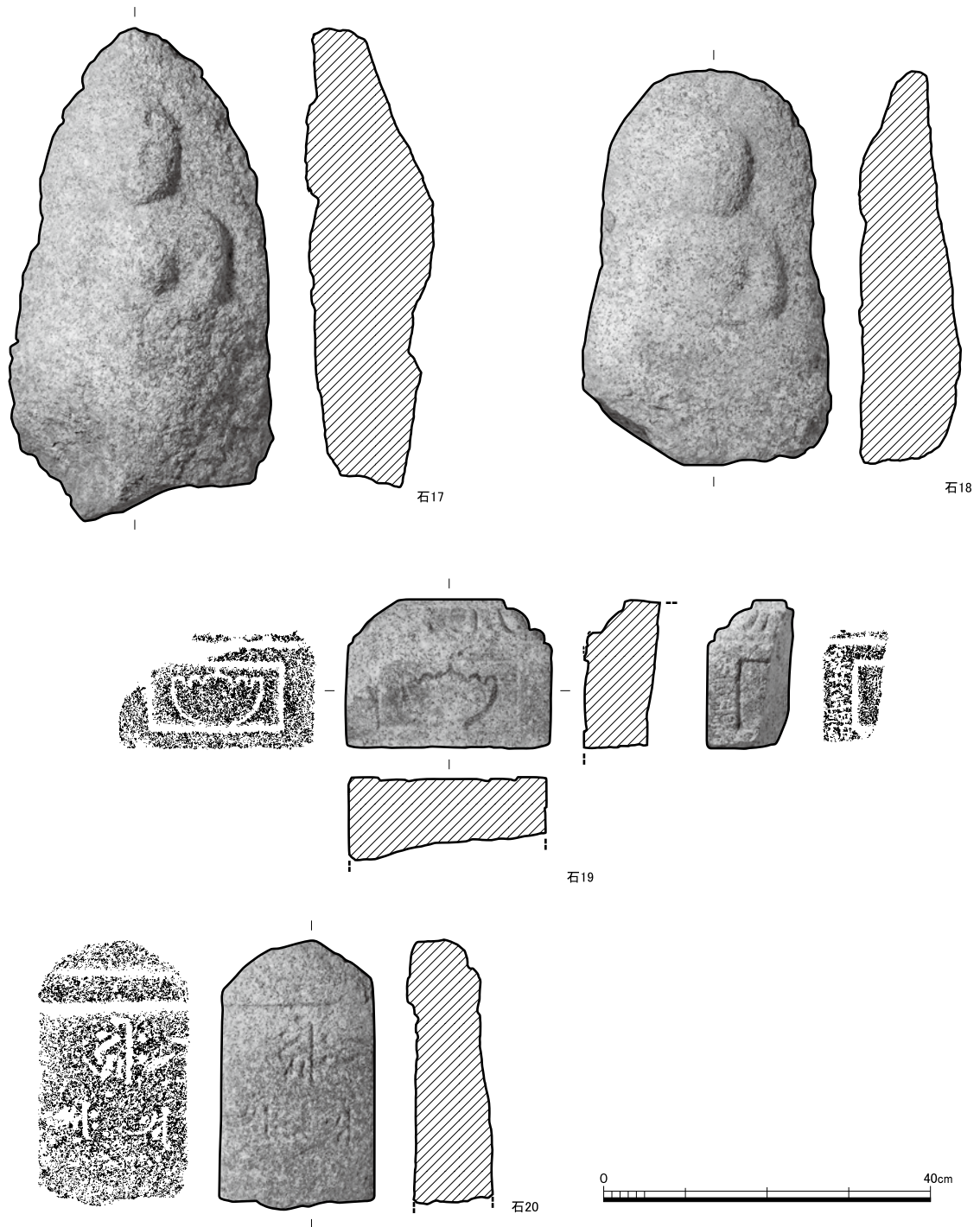


図45 石製品実測図3 (1 : 8)

下部が欠損する。表面・側面が滑らかで磨滅している。石材はにぶい黄橙色の砂岩である。火を受けて赤変し脆い。土坑509から出土した。石7は細長い扁平の自然石を利用した砥石で、上面に使用痕がある。先端を尖らせる用途に使ったものと考えられる。石材は灰色の砂岩である。溝513から出土した。

五輪塔(石8~16) 積み上げ五輪塔の一部である。石8~10は空・風輪で、風輪下端には組み合わせの突起を作る。石11・12は火輪で、上端に風輪と組み合わせる窪みを作る。石12の側面に

梵字とみられる文字を彫る。石13～15は水輪である。石13は上端に窪み、下端に地輪と組み合わせる突起を作る。石14・15は上端に火輪と、下端には地輪と組み合わせる窪みがある。石16は地輪で、下部は欠損する。上端を彫り窪める。石11は1区近代整地層、石10・16は土橋の石材、他は溝513から出土した。

石仏（石17・18） 前面に一尊の如来坐像を浮き彫りに刻む。溝513から出土した。

墓石（石19・20） 石19は台座で上部は欠損する。台座には蓮弁が、正面は方形に窪めた中央に蓮花を彫る。側面には「□□廿八年四月三十日」と彫り込む。土橋の石材として転用されていた。石20は前面を彫り窪め中央上と左右、3箇所を梵字を彫り込む。「阿弥陀三尊」を表しており、中央上は「キリーク」で阿弥陀如来を、左側は「サク」で勢至菩薩を、右側は「サ」で観音菩薩を表す。溝513から出土した。

註

- 1) 『六波羅蜜寺の研究』 財団法人元興寺仏教民族資料研究所 1979年

5. まとめ

今回の調査では、2011年度調査¹⁾で検出した室町時代の六波羅蜜寺本堂北門の北側と南側の様相を明らかにすることができ、また弥生時代後期の流路、平安時代中期の溝を検出したことなどから旧地形や土地の利用状況の変遷が判明するなど大きな成果が得られた。ここでは、2011年度調査¹⁾とあわせて得られた成果を各時代ごとに述べる。

弥生時代後期から奈良時代 (図47)

調査地の旧地形はY=-20,712辺りを境に東は比較的平坦な地形であったこと、そのような地形を選んで六波羅蜜寺が造られたことがわかる (図46)。標高は37.2~37.4mである。西はそのまま下って傾斜する地形となり、2011年度調査区の西端Y=-20,733付近の標高は34.4mである。検出した遺構は弥生時代の流路で2条ある。高台の東で流路74を、西の傾斜面で流路335を検出した。ともに南北方向で、流路74は埋土から弥生時代後期の土器が出土した。西肩には土を入れて護岸が造られ、流路底には杭が打ち込こまれているなど人為的に管理されていることが判明した。このことから、この周辺に集落があったと考えられる。しかし何らかの理由で集落は移動してしまい、流路は自然堆積によって埋まってしまったことが確認できた。流路335は埋土から弥生時代後期だけでなく、古墳・奈良時代の遺物が出土しており、長期にわたり存在したこと、それが平安時代までには埋まっていたことがわかる。2011年度調査の報告書では「ここより南東にある今熊野南日吉町と東福寺裏の本町 (月の輪遺跡) では弥生時代中・後期の土器が出土している。月の輪遺跡では溝が検出され、土器の出土状況から集落遺跡が存在した可能性が指摘されている。このことから、出土した弥生時代の遺物は流路上流周辺に遺跡があることを示すものといえる。」としたが、管理された流路74を検出したことで、住居跡などの遺構は確認されていないが、この周辺に集落の存在が考えられる。東山の地域にはまだ幾筋ものこのような流路があったと推測する。

また、2011年度調査で出土した古墳時代の円筒埴輪や土器の破片は、1981年度の六波羅蜜寺境内の発掘調査²⁾で流路から出土した円筒埴輪や土器と考え合わせると、この付近に古墳が築かれていた可能性がある。今回の調査では古墳時代の遺物は出土していないが、調査地北東の高台寺境内にある八坂古墳や華頂山山頂の將軍塚古墳群があることや、六波羅蜜寺本堂境内にある阿古屋塚の土台に家型石棺の蓋が転用されていることなどから、その可能性が高い³⁾。現在、阿古屋塚は本堂南にあるが、「都名所図絵」には本堂の北に描かれている。

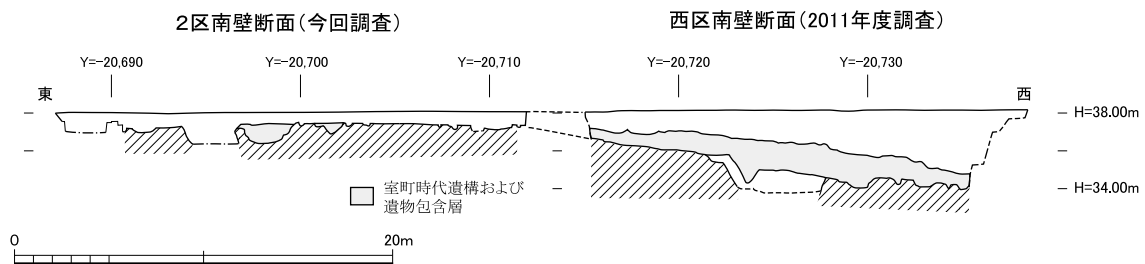
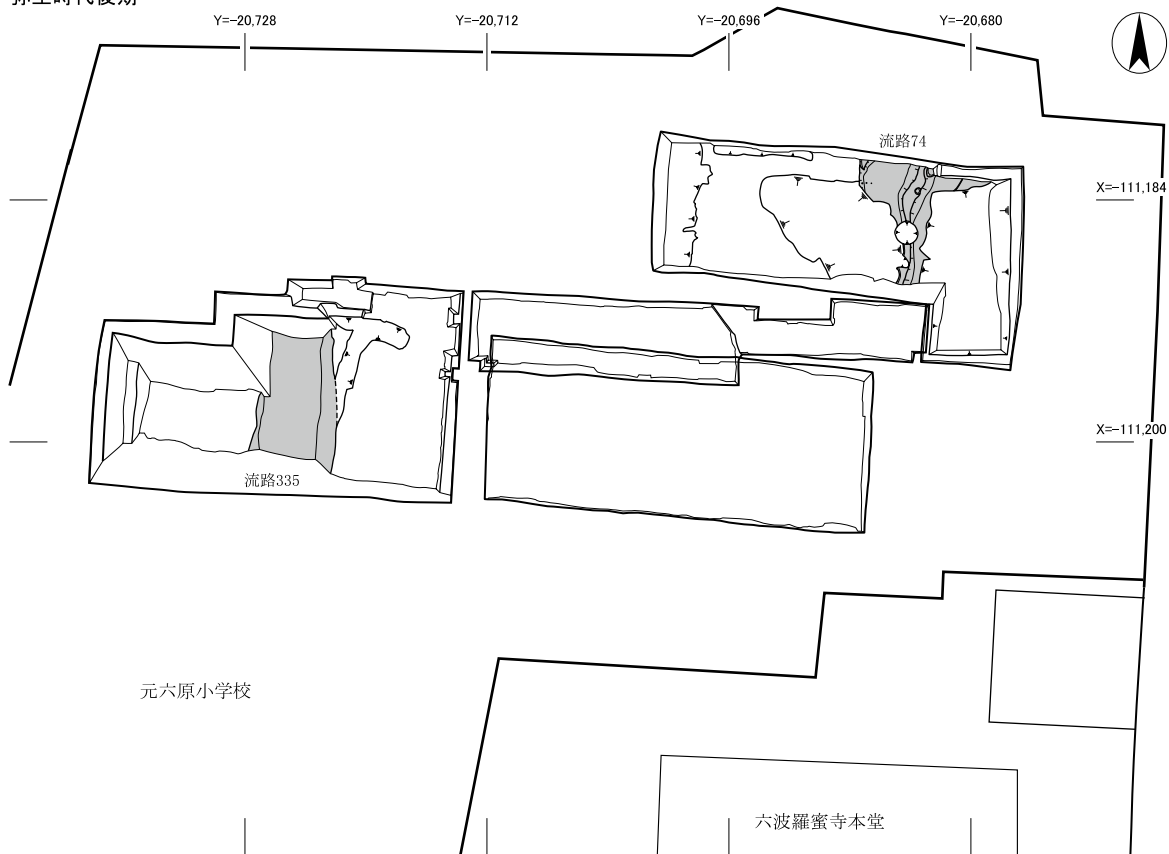


図46 調査区旧地形模式図 (1:400)

弥生時代後期



平安時代から鎌倉時代

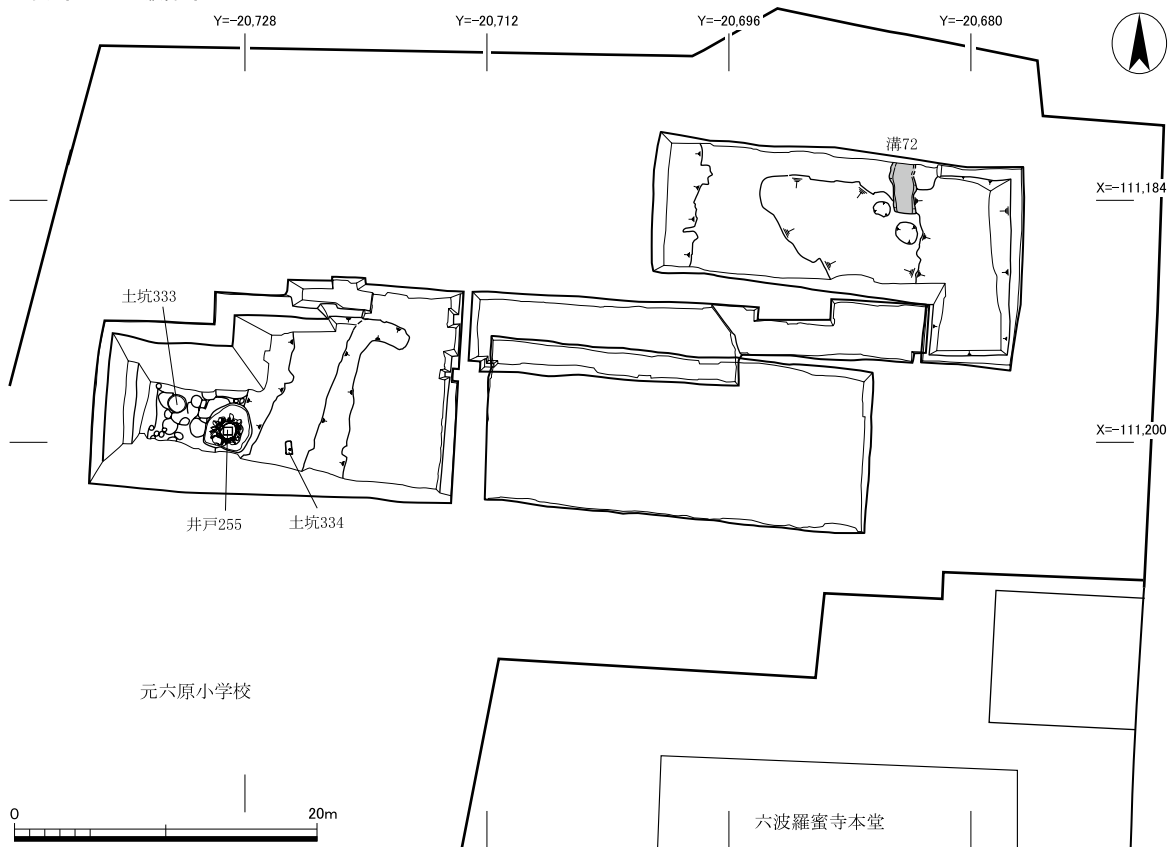


図47 遺構変遷図1 (1 : 500)

平安時代 (図47)

平安時代の遺構には、平安時代前期の土坑334、中期の土坑333・溝72、後期の遺物包含層がある。特に土坑334は方形の土坑で、木目痕がついた鉄釘や口縁部を打ち欠いた壺が出土し、木棺墓と考えられる。また、流路335の埋土からも同じような木目痕のついた鉄釘が出土しており、他にもこのような墓があった可能性がある。この地は愛宕郡条里によると鳥部郷三条野振里の北東部に⁴⁾あたる。「鳥辺野」は西の化野、北の蓮台野と並び洛外の葬送の地であったことから、当地周辺は墓所であったと考えられる。土坑333、南北方向の溝72からはともに10世紀中頃の土器が出土しており、応和3年(963)空也上人がこの地に六波羅蜜寺の前身である西光寺を建立した時期と重なり、これらの遺構は西光寺との関連が考えられる。また、ここは平安京の五条大路(現在の松原通)の東延長上にあたり、当時から珍皇寺、八坂寺(法観寺)、清水寺への参詣路として民衆が往来するところであった。空也上人がここに西光寺を建てたのもこのような理由があったものと思われる。清水寺への参詣の様子は後白河上皇が編集した『梁塵秘抄』(314番)にも歌われている。その頃の遺物包含層がY=-20,722付近の調査区北側にある黒褐色砂泥層で、平安時代後期の遺物が平安時代後期の人の活動状況を示している。

鎌倉時代 (図47)

鎌倉時代の遺構は石組井戸255や土坑などがある。今回の調査では鎌倉時代の遺構は検出しておらず、遺物包含層や後世の遺構などに混入した土器がごく少量出土したのみである。

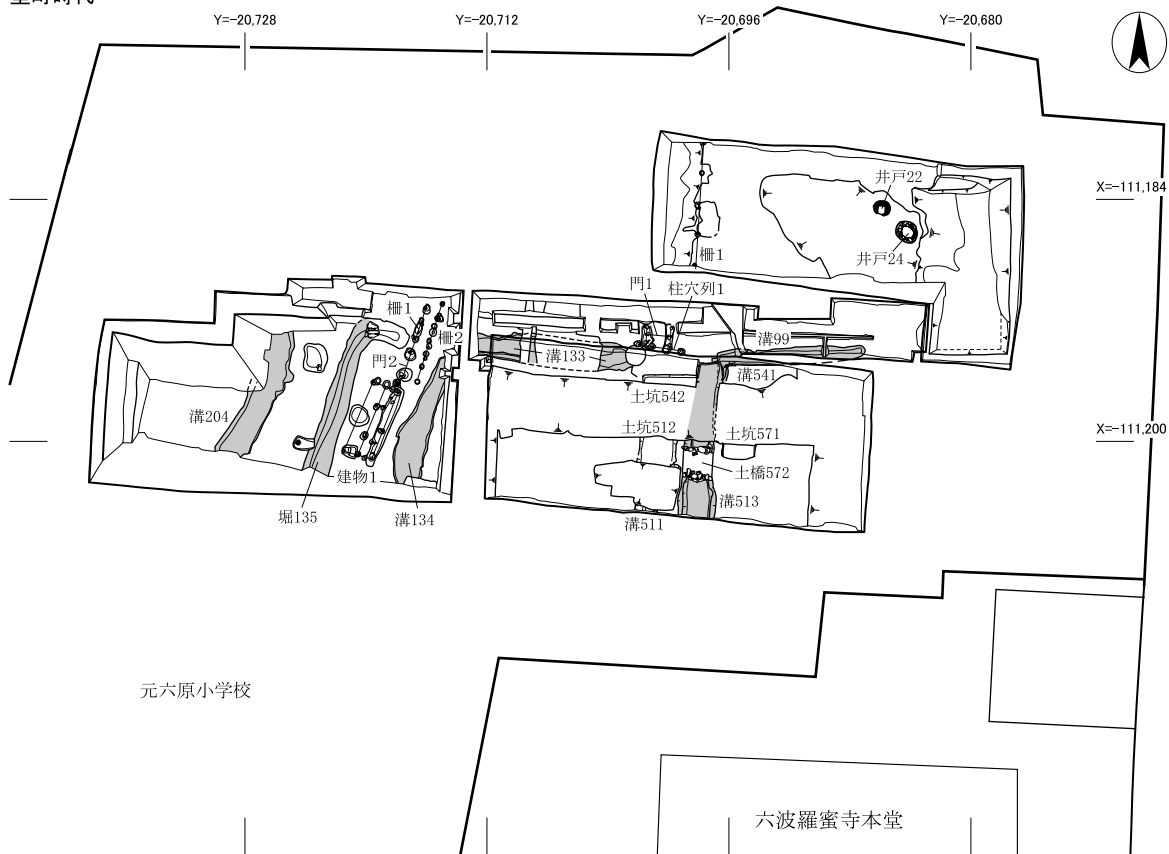
『続南行雜録』⁵⁾によると、安貞2年(1228)「七月二日鴨川出水により、当寺西門傾倒す。」とあり、少なくともこの時期の六波羅蜜寺に西門が存在したこと、また、そこまで鴨川の水が押し寄せたことから、西門はY=-20,712付近で検出した傾斜の下に存在していたものと考えられる。

室町時代 (図48)

室町時代の遺構には、門・建物・溝・堀・柵・土坑・柱穴などがある。またこれらの遺構とともに、膨大な量の土を使ってY=-20,712以西の斜面を大々的に造成・整地されていたことが判明した。六波羅蜜寺寺域の北部では、北限を示す門1(北門)や内溝99・133を検出した。また、西部では防御施設が作られていた様子が判明した。内溝133は溝134と合流し南に曲がり、溝134の西には南北に細長い建物が建ち、建物の北に取り付く門や北に延びる柵が並ぶ。さらに前面の西には薬研堀の堀135を配置している。建物はおそらく物見櫓と考えられ、北隣りにある脇門や柵、薬研堀の堀を合わせた複合的な防御施設である。ここより西で検出した南北溝204は、堀を築く直前までの六波羅蜜寺の西限であったと考えられる。防御施設の時期は、大半が室町時代後期後半(16世紀中頃)に属し、天文法華の乱などの時期と重なる。これらの遺構は、争乱が収まる16世紀後半には段階的に埋められて整地される。墓が作られるようになり、江戸時代には墓地となっていたようである。また溝134の埋土や整地層から多量の瓦器鍋・羽釜が出土し、その中に焼骨が残存しているものがあることから、これらは蔵骨器として使用されたものであることがわかる。従って室町時代のこの地区は防御施設などが造成される以前も墓域であったと考えられる。

六波羅蜜寺本堂の北門(門1)の北側で検出した南北方向の柵は、六波羅蜜寺本堂北門に通じる

室町時代



江戸時代から近世

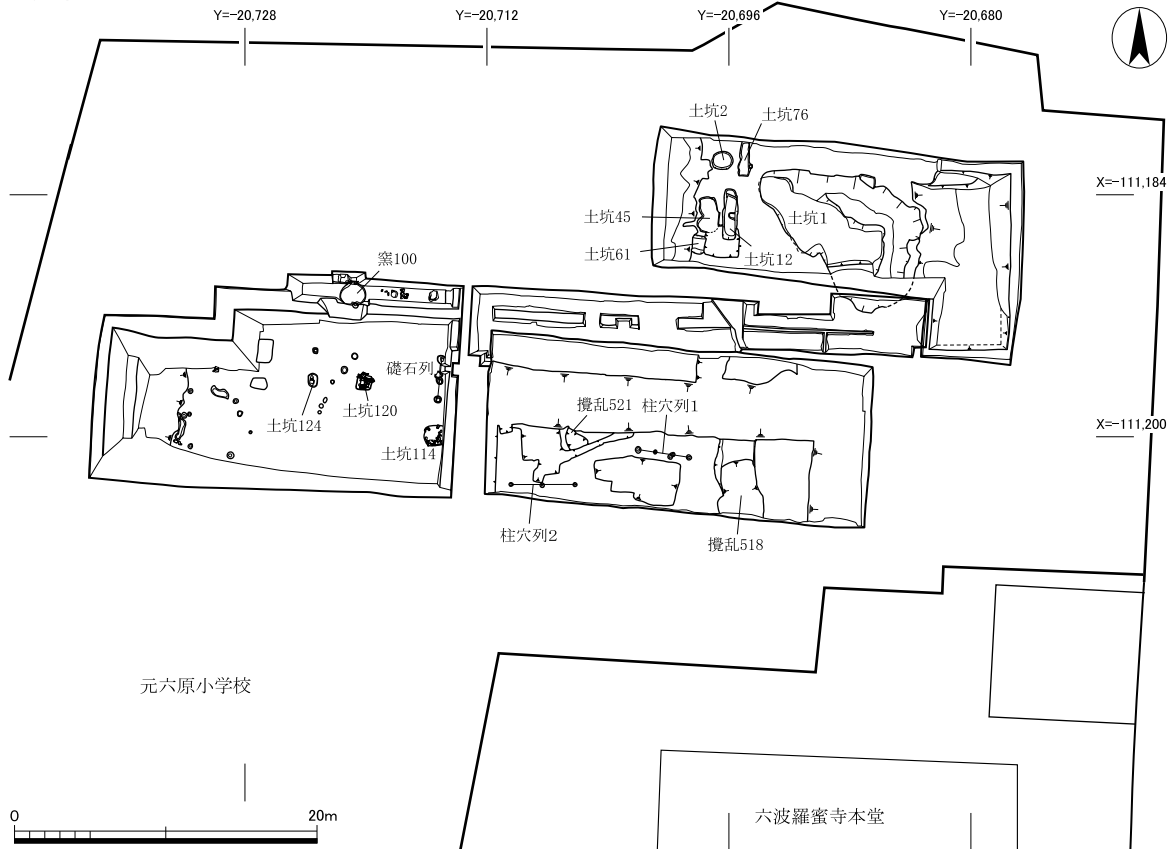


図48 遺構変遷図2 (1 : 500)

道路の東側を区画するものと考えられる。柵の東側には柱穴や井戸22・24があることから、六波羅蜜寺関連の雑舎があった可能性がある。門の南側で検出した南北方向の溝513は、出土遺物から溝99より造られた時期が新しいことが判明した。これは堀135や建物などの防御施設が造られた時期と一致しており、この溝513も防御のため、先行する溝99が南に曲がる部分を拡張して造り替えたものか、新たに造ったものである可能性がある。また、この溝に土橋を造り通路とした時期も西側の堀135が石で埋められた時期と同時期で、防御施設の必要がなくなってから造られたものと考えられる。やがて江戸時代にはこの土橋も溝も埋められて、整地された上に建物が建てられる。

江戸時代から近代 (図48)

江戸時代から近代の遺構には土坑や柱穴列がある。西側斜面で検出した土坑114・120・124は江戸時代の墓の可能性もある。礎石列や柱穴列1・2は六波羅蜜寺境内の建物の一部と考えられる。江戸時代後期の遺構には土坑がある。土坑1は大規模で、多量の遺物が廃棄されたゴミ穴である。出土遺物には土器の他に窯道具や埴塼など铸造関係の遺物がある。特に窯道具のサヤ鉢やトチンなどは清水焼生産地としてのこの地の特徴を表しており、明治5年に六原校が建てられるまでの様子が窺える。他に近代の遺構として窯100がある。内部に煤が付着することから温度焼成の低いものを生産していたと考えられる。

今回の調査では2011年度調査成果と合わせて、六波羅蜜寺の北西隅の様子が判明した。本堂北西部は平安時代から江戸時代まで続く墓所で、室町時代には一時期防御施設がつくられ、大きく造成されたこともわかった。六波羅蜜寺の前身である西光寺と同時期の溝や弥生時代後期の流路を検出したことなど大きな成果があった。今後、周辺での調査が進めば、六波羅蜜寺境内の変遷のより詳しい状況が解明されると期待できる。

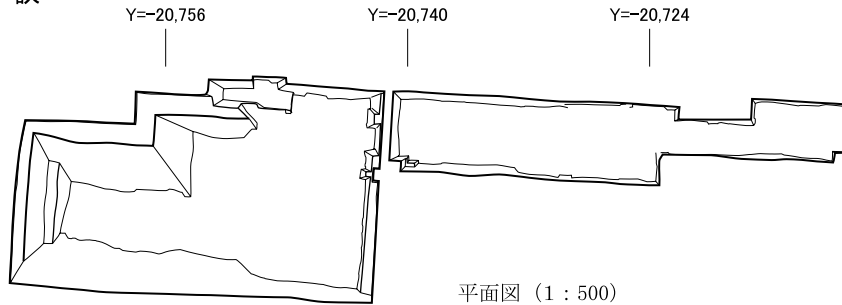
註

- 1) 『六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 2) 前田義明「六波羅政庁跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 3) 『史料 京都の歴史10 東山区』平凡社 1987年
- 4) 高橋昌明「平正盛と六波羅蜜堂」『京都地域史の研究』国書刊行会 1979年
- 5) 「続南行雑録」祐茂記抄 元禄2年(1689)、大日本史編纂の史料調査のため、京都・奈良に大串雪瀾を派遣、社寺の旧記を閲読させ一書としたもの。先行して、天和元年(1681)に吉弘菊潭・佐々十竹を派遣、集めて冊子とした「南行雑録」がある。『大日本史料』歴史上の重要事件の概要をあらわし、その関連史料を列挙したもの。仁和3年(887)から慶応3年(1867)までの約980年を16の編に分けて編纂。第12編(江戸時代初期)までを着手。現在は東京大学資料編纂所が編集。関連文書、記録、系図や家譜、後世の著作や地誌など多様なものがある。

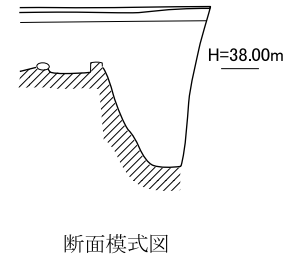
※お詫びと訂正

2011年度調査の報告書『六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-6 の挿図すべてのY座標と標高の数値が誤っていました。正しくはY座標の数値から28m、標高の数値から0.35m引いた数値です。

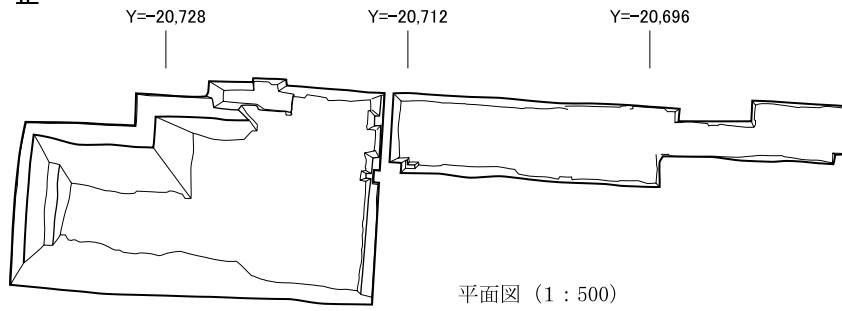
誤



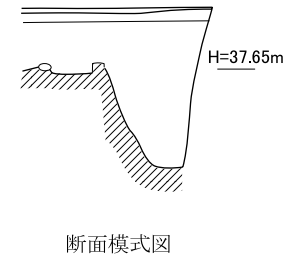
誤



正



正



付章1 始良Tn(AT)火山灰分析

小野映介(新潟大学)・河角龍典(立命館大学)

1. はじめに

京都盆地では、遺跡の発掘調査時に始良Tn火山灰〔以下、AT火山灰と呼ぶ〕が度々検出されている(河角 2004; 中川 2006 など)。AT火山灰は南九州の始良カルデラの噴火を起源とし、降灰年代は $30,009 \pm 94$ yr BP(中川・水月湖2006年コアプロジェクトメンバー 2013)とみられている。

最終氷期末に降灰したAT火山灰の分布や堆積状況のデータ収集は、旧石器時代の京都盆地の景観復原を行う上で必要不可欠な作業である。

今回、京都盆地東縁部の六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡の本調査においてAT火山灰を確認する機会を得たので、周囲の地形と堆積状況を報告する。なお、火山灰の同定についてはパレオ・ラボの藤根久氏に依頼した。

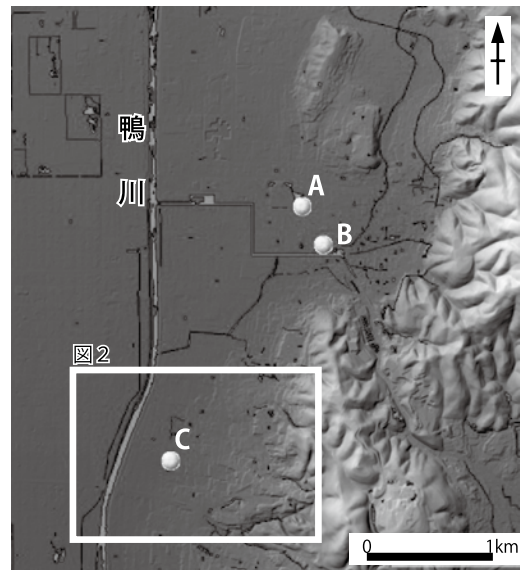


図1

2. 遺跡周辺の地形

京都盆地の東縁部には、扇状地の発達が広く認められる。発掘調査区(図1のC)周辺の扇状地は、東山を削る複数の谷から流出した土砂によってかたちづくられており、標高50mと40mに傾斜の変換点が認められる(図2)。扇頂部に相当する標高50m以上

以上に比して、それよりも低い標高50~40mの地域が急傾斜であるという特異な形態からは、当地域の扇状地が数期にわたって形成されたことが示唆される。

調査区は、標高40m以下の緩傾斜の扇状地に位置する。調査区の西側には鴨川の氾濫原が広がっており、扇端と氾濫原の境界には、所々に小崖が認められる。

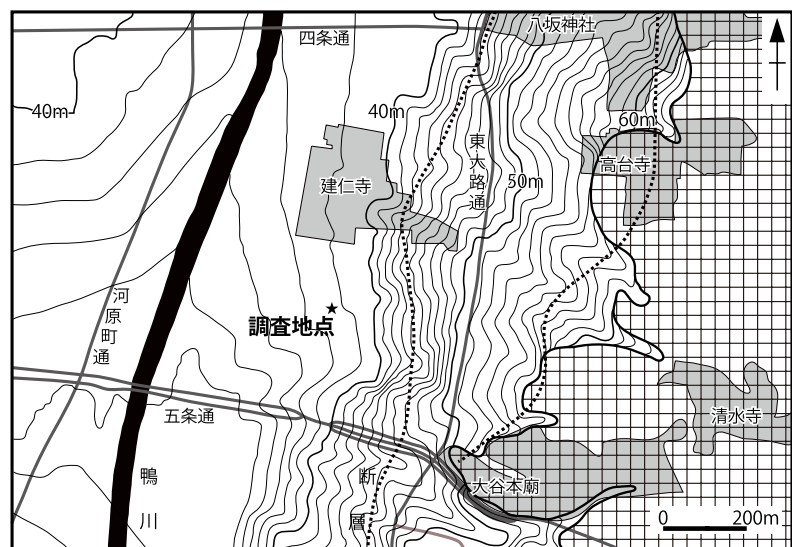


図2

3. 火山灰の堆積状況と分析結果

(1) 地層断面の観察結果

トレンチの2箇所に記載した地層断面の柱状図を図3に示す。1区土坑1北壁：130813-1地点 [34° 59' 51.29" N : 135° 46' 23.99" E] では、1,200 AD - 1,300 ADの遺構検出面以深の標高37.19 m - 35.29 mの堆積物を調査した。堆積物は下位より、礫、シルト混じり極細砂、シルトと極細砂の互層、有機質泥、火山灰 [標高37.11 m - 36.93 m (層厚0.18 m)]、無機質シルト、粗砂混じり極粗粒砂から成る。火山灰層は上方細粒化が認められた。

一方、2区攪乱518西壁：130813-2地点 [34° 59' 50.74" N : 135° 46' 23.72" E] では、室町時代の遺構検出済み面以深の標高37.34 m - 36.34 mの堆積物を確認した。堆積物は下位より、有機質泥 (所々に礫混入)、火山灰 [標高36.89 m - 36.84 m (層厚0.05 m)]、無機質泥、火山灰層 [36.93 m - 36.94 m (層厚0.01 m)]、無機質泥、粗粒砂混じり中粒砂から成る。

(2) 火山灰の分析結果

a. RT-1

130813-1地点の標高37.11 m - 36.93 mに堆積した火山灰の下部から試料を採取し、各種分析を実施した。湿式篩分けを行った結果、4φ以上の残渣は全体の43.34%であった。4φ篩残渣が最も多く残渣全体の53.59%であった。また、重液分離を行った結果、軽鉱物の割合が98.62%と非常に高く、重鉱物の割合は1.38%であった。

4φ篩残渣中の軽鉱物組成は、火山ガラスが88.56%と圧倒的に多い。形態分類では、バブル (泡) 型平板状ガラス (b1) が最も多く、次いでバブル (泡) 型Y字状ガラス (b2) が多く、全体としてバブル (泡) 型の火山ガラスが多い。同様に、重鉱物組成は、斜方輝石 (Opx) が最も多く、単斜輝石 (Cpx)、角閃石 (Ho)、ガラスが付着した磁鉄鉱 (Mg) などが含まれていた。

火山ガラスの屈折率測定では、主にバブル (泡) 型の火山ガラスを測定し、範囲が1.4988 - 1.5003の狭い範囲に集中し、平均値が1.4995であった。

このガラス質火山灰は、細粒の火山ガラスからなる純層火山灰であり、火山ガラスの形態的特徴や屈折率測定結果から、AT火山灰と同定された。

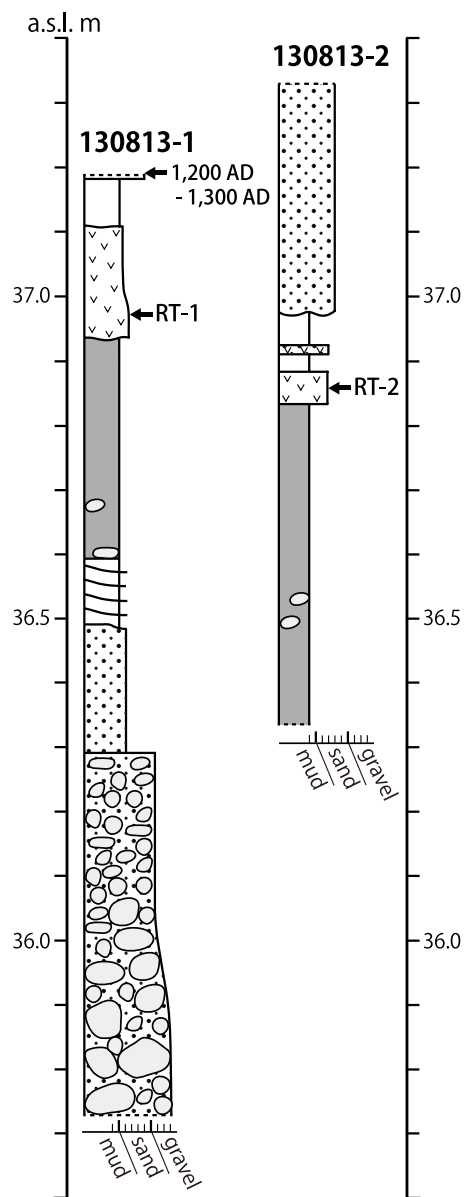


図3

b. RT-2

130813-2地点の標高36.89m-36.84mに堆積した火山灰試料の分析結果は以下のとおりである。湿式篩分けを行った結果、4φ以上の残渣は全体の46.79%であった。3φ篩残渣が最も多く残渣全体の56.20%であった。また、重液分離を行った結果、軽鉱物の割合が96.66%と非常に高く、重鉱物の割合は3.34%であった。

4φ篩残渣中の軽鉱物組成は、火山ガラスが97.52%と圧倒的に多い。形態分類では、バブル(泡)型平板状ガラス(b1)が最も多く、次いで軽石型繊維状ガラス(p1)が多く、全体としてバブル(泡)型の火山ガラスが多い。同様に、重鉱物組成は、斜方輝石(Opx)が最も多く、単斜輝石(Cpx)、角閃石(Ho)、ガラスが付着した磁鉄鉱(Mg)などが含まれていた。

火山ガラスの屈折率測定では、主にバブル(泡)型の火山ガラスを測定し、範囲が1.4983-1.5001の狭い範囲に集中し、平均値が1.4994であった。

このガラス質火山灰は、細粒の火山ガラスからなる純層火山灰であり、火山ガラスの形態的特徴や屈折率測定結果から、AT火山灰と同定された。

4. 京都盆地東縁部におけるAT火山灰の堆積状況

上述のように、本調査では、純層のAT火山灰が遺構の下位から検出された。130813-2地点では、純層AT火山灰の上に無機質泥を挟んでもう一枚の薄い火山灰層が確認されているが、同層は砂粒を多く含んでいることからAT火山灰の二次堆積の可能性が高い。

今回の調査によって、当地域は更新世の段丘面から成ることが明らかになった。京都盆地東縁部では、これまでもAT火山灰の検出が報告されている。池田・石田(1972)が平安神宮神苑内(図1のA)で発見した火山灰は、その上位と下位の有機物の年代値からAT火山灰であると推定される。また、法勝寺・岡崎遺跡ではAT火山灰直上の泥炭層から大型偶蹄類の足跡化石が検出されている(内田1994)。加えて、未報告であるが著者らは2010年に実施された法勝寺八角九重塔跡(図1のB)発掘調査において、AT火山灰層を確認している。

今後、これらのデータをもとに京都盆地東縁部における地形発達史を編む予定である。

【引用文献】

- 池田碩・石田志朗 1972. 平安神宮神苑内の火山灰層上下の木材と泥炭の年代. 地球科学26, 179-181.
- 内田好昭 1994. 法勝寺・岡崎遺跡. 平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要. 84-86.
- 河角龍典 2004. 歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化 - 遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築 -. 京都歴史災害研究1, 13-23.
- 中川和哉 2006. 旧石器時代の京都. 京都府埋蔵文化財情報101, 1-12.
- 中川 毅・水月湖 2006. コアプロジェクトメンバー (2013) 水月湖クロノロジーに基づいた、いくつかの広域テフラの精密な年代決定. 日本第四紀学会講演要旨集43, 132-133.

付章2 花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡は、京都盆地の東を限る東山西麓の扇状地から低地に立地している。今回の発掘調査では、弥生時代後期の遺物が出土する流路跡、平安時代中期、室町時代の各遺構が検出されている。本報告では、弥生時代後期の流路充填堆積物を対象として、当該期の古植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析を実施した。

1. 試料

調査地点である1区北壁断面の模式断面図を図1に示す。調査区の堆積物は、現代の人為的掘削によって削平されているため、層相変化を把握できない層準が多い。残存している堆積物の層相を以下に示す。

調査区の各時期の遺構の基盤をなす堆積物は、側方への層相変化が激しい砂礫～砂質泥からなる。層相から扇状地性堆積物と判断される。なお、基盤堆積物の標高37.1m前後層準に始良Tnテフラ(AT)を挟在する。今回分析対象とした、流路跡は、この扇状地性堆積物を侵食して形成されている。

流路充填堆積物の層相は、上位より、15層がにぶい黄褐色砂質泥からなる。下位の16層との層界は明瞭で、水位の上昇などに伴い形成された堆積物がみられる。16層は細礫混じり黒色腐植質砂質泥からなり、著しく擾乱ないし人為的に攪拌されている。土壤生成が進行している状況が確認される。17層は黒褐色腐植質泥からなる。擾乱されており、初生の堆積構造は確認されない。植物遺体をほとんど含まないことから、土壤生成が進行する時期を挟在する湿地のような堆積場で形成されたことが推定される。18層は下位の19層の侵食時に形成された細粒～中粒砂からなり、部分

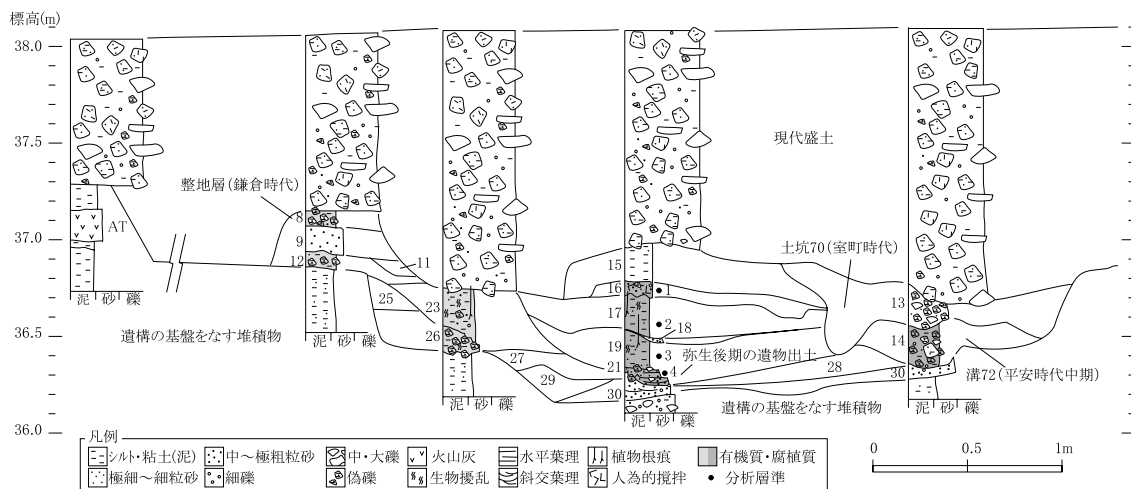


図1 調査地点の模式断面図

的に葉理が残存する。19層は黒灰色腐植質泥からなり、著しく擾乱されており、土壤生成が進行する時期を挟在する湿地のような堆積環境で形成されたことが推定される。21層は上方細粒化する低角度のトラフ型斜交葉理をなす粗粒～細粒砂からなる。本層下位の流路充填堆積物である23・27～30層の侵食時に形成された水流下で形成された堆積物である。本層からは弥生時代後期の遺物が出土する。23・27～30層および25・26層は流路充填堆積物下部に相当する。これらの堆積物と、基盤堆積物の層界は明瞭で、流路肩部にかけての斜面では人為的攪拌の痕跡が確認される。25～27・29層は流路肩部側より供給された、人為的攪拌により生じた基盤堆積物の偽礫・微小ブロック、炭片、流路周辺の土壌由来の堆積物を挟在する泥質砂～砂質泥からなる。30層は流路形成時に堆積した、低角度のトラフ型斜交葉理をなす極粗粒砂～中粒砂からなる。

以上の層相変化から、流路跡は30層形成期に流路として機能していたが、この段階で流路河岸～斜面に対して護岸整備など何らかの人為的営力が及び、25・31層や基盤堆積物由来の29層などの偽礫からなる堆積物が形成される。28～27層形成期には流路は何らかの理由により放棄流路へと変化し、流路河岸などの土壌やその偽礫などが流入する堆積環境へと変化する。これらの堆積物には基盤堆積物の偽礫・微小ブロックのほか、炭片が多く混じることなどから、埋積期を通じて周辺で人間活動が継続していたことが示唆される。また、23層最上部は現代の削平により消失しているものの、残存部の上部層準において腐植含量が多くなることから、流路肩部にかけて斜面では土壤生成が進行する堆積環境に変化した可能性がある。弥生時代後期以降の21層形成期には、これらの堆積物を再侵食するが、19層形成期には再び土壤生成が進行する時期を挟在する湿地のような堆積場に変化する。このような堆積場は基本的に17層形成期まで継続し、16層形成期に土壤生成が進行する堆積場へと変化する。その後、15層形成期には基準面上昇など何らかの水文条件の変化により、地下水位が上昇し沼沢地のような堆積場へ変化する。

花粉分析は、弥生時代後期の遺物出土層準である21層から上位の19層、17層、16層の4層準について実施する。

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や鳥倉（1973）、中村（1980）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪

曲する恐れがあるので、産出した種類を+で表示するにとどめておく。

3. 結果

結果を表1、図2に示す。花粉化石の産出状況は、いずれの試料においても良好といえず、かろうじて試料番号1,2から、木本花粉100個体程度の花粉化石が検出された。保存状態はどちらの試料も悪く、シダ類胞子が多産する傾向が認められる。群集組成は類しており、木本花粉ではツガ属が最も多く、モミ属、マツ属、コナラ属アカガシ亜属などが多く産出する。その他ではマキ属、コウヤマキ属、スギ属、サワグルミ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ科などを伴う。試料番号3,4は、花粉化石の産出状況が悪く、定量解析を行えるだけの個体数を得ることができなかった。検出される種類をみると、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、アカガシ亜属等が、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科等が認められる。

4. 考察

弥生時代後期の遺物が出土する21層、およびその直上の19層では、花粉化石がほとんど検出されなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、

表1 花粉分析結果

種類	上段:層名		下段:試料名	
	16層	17層	19層	21層
	1	2	3	4
木本花粉				
マキ属	2	1	-	-
モミ属	14	9	4	1
ツガ属	47	65	18	2
マツ属複雑管束亜属	2	2	-	-
マツ属(不明)	16	10	6	1
コウヤマキ属	3	3	1	1
スギ属	4	5	4	-
ヤマモモ属	1	-	-	-
サワグルミ属	-	2	-	-
クマシダ属-アサダ属	-	1	-	1
ブナ属	1	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	2	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	12	3	5	-
クリ属	1	-	-	-
シイ属	1	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	1	-	-	-
モチノキ属	-	1	-	-
ウコギ科	1	-	-	-
スイカズラ属	-	1	-	-
草本花粉				
イネ科	60	39	15	1
カヤツリグサ科	5	5	2	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	2	1	-	-
アカザ科	1	1	-	-
キンボウゲ科	-	1	-	-
オミナエシ属	1	3	-	-
ヨモギ属	18	9	5	-
キク亜科	4	6	1	2
タンポポ科	6	1	-	1
不明花粉				
不明花粉	8	7	1	1
シダ類胞子				
ヒカゲノカズラ属	4	4	1	1
ゼンマイ属	-	1	-	-
イノモトソウ属	1	-	-	1
他のシダ類胞子	204	297	59	33
合計				
木本花粉	108	104	38	6
草本花粉	97	66	23	4
不明花粉	8	7	1	1
シダ類胞子	209	302	60	35
合計(不明を除く)	414	472	121	45

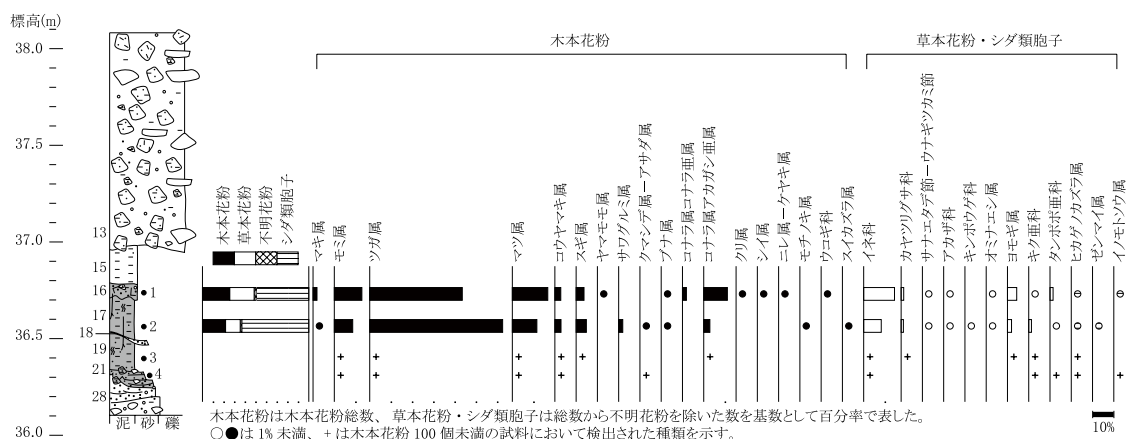


図2 花粉化石群集の層位分布

元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。今回わずかに産出された花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められた。これらのことと上記した層相からみた堆積環境を踏まえると、21層については双方の可能性、19層については堆積時に取り込まれた花粉や胞子が、土壤生成作用などの影響により分解・消失したと考えられる。なお、検出される種類は、17層・16層で多産する木本類・草本類であることから、後述する植生と同様の植生を反映している可能性がある。

一方、土壤生成が進行する時期を挟在する湿地のような堆積場で形成された17層・16層では、比較的多くの花粉化石が検出されたものの、産出状況は良好でなく、保存状態が悪かった。層相から土壤生成作用などの風化作用が原因と考えられる。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など）。検出された花粉化石についてみると、ツガ属、モミ属、マツ属などの針葉樹由来の花粉およびシダ類胞子が多く産出し、このほか比較的分解に強い花粉や分解が進んでも同定可能な花粉が検出される。これらのことから17層・16層から検出された花粉・シダ類胞子化石は、堆積時に取り込まれた花粉が、その後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉が選択的に残されたと考えられる。したがって、当時の周辺植生を正確に反映していない可能性があることを考慮した上で、古植生の検討を行う。

検出された木本類についてみると、ツガ属、モミ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属等の針葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹が検出される。既存の調査例によると、京都盆地の縄文時代中期から晩期にかけての大型植物遺体には、暖温帯性のイチイガシ、アカガシ近似種、ムクノキなどに、冷温帯性のトチノキ、アサダ、キハダ、イタヤカエデ、オニグルミなどを伴うとされているが、約2,000年前頃になると降水量が増加し、モミ、ツガ、コウヤマキ、スギなどの温帯性針葉樹が多くなったとされている（高原,1998）。今回検出された種類を参考にすると、遺跡周辺から清水山などの東山周辺にかけて、ツガ属をはじめとした温帯性針葉樹と、アカガシ亜属を主体とする常緑広葉樹が混交ないし、立地特性に応じて棲み分けていた可能性がある。また、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等は周辺河川沿いに、ブナ属などはより標高の高い後背山地などに生育していた可能性がある。

また、流路周辺には、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ科などの、いわゆる「人里植物」に属する草本類が生育していたと推測される。

引用文献

三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15－30.

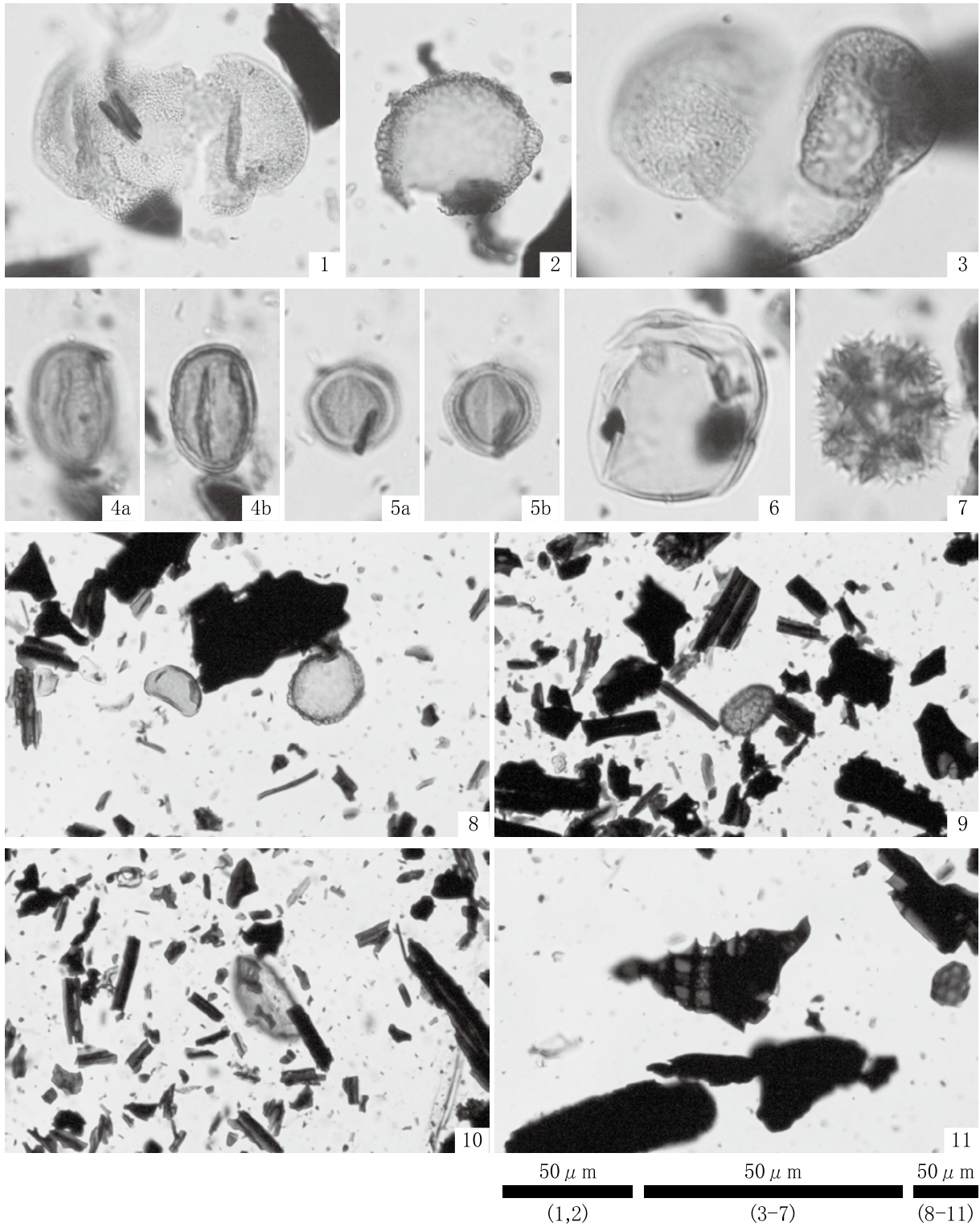
中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.

中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.

高原 光,1998,近畿地方の植生史,安田喜憲・三好教夫(編著),図説 日本列島植生史,朝倉書店,114－137.

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50－73.



- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. モミ属(試料番号1) | 2. ツガ属(試料番号1) |
| 3. マツ属(試料番号1) | 4. コナラ属アカガシ亜属(試料番号1) |
| 5. ヨモギ属(試料番号1) | 6. イネ科(試料番号1) |
| 7. タンポポ亜科(試料番号1) | 8. 分析プレパラート内の状況(試料番号1) |
| 9. 分析プレパラート内の状況(試料番号2) | 10. 分析プレパラート内の状況(試料番号3) |
| 11. 分析プレパラート内の状況(試料番号4) | |

図3 花粉化石

圖 版



1 1区全景（北西から）



2 1期土坑1南壁断面（北から）



1 1期 土坑12検出状況（南から）



2 1期 土坑76完掘状況（北から）



3 2期 井戸22（東から）



4 2期 井戸24（北から）



1 3期 溝72 (南から)



2 4期 流路74 (南から)



1 4期 流路74土器出土状況（北から）



2 北壁断割状況（南東から）



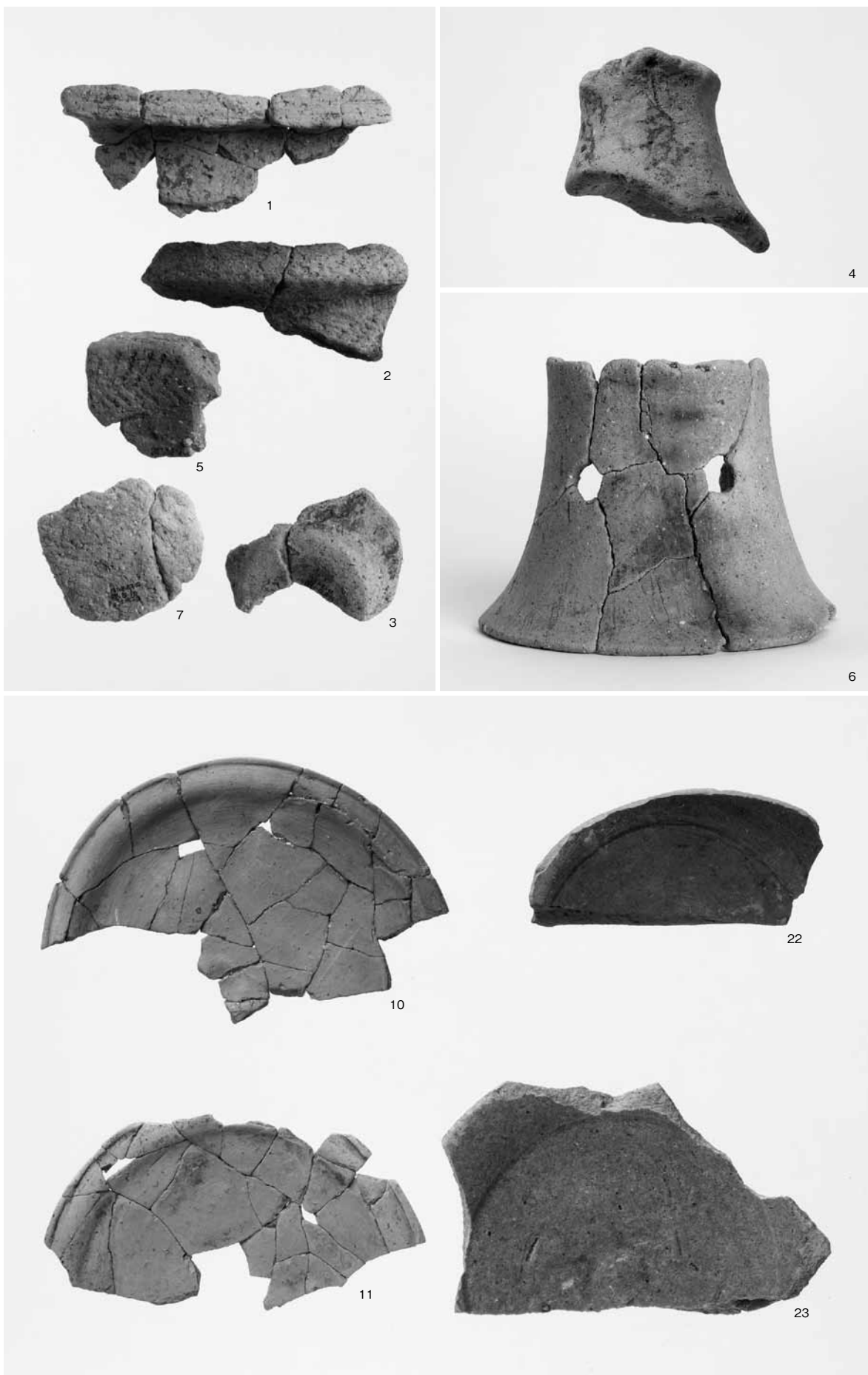
3 2区全景（東から）



1 2期 溝513・土橋572検出状況（北東から）



2 2期 土橋572南石列検出状況（南から）

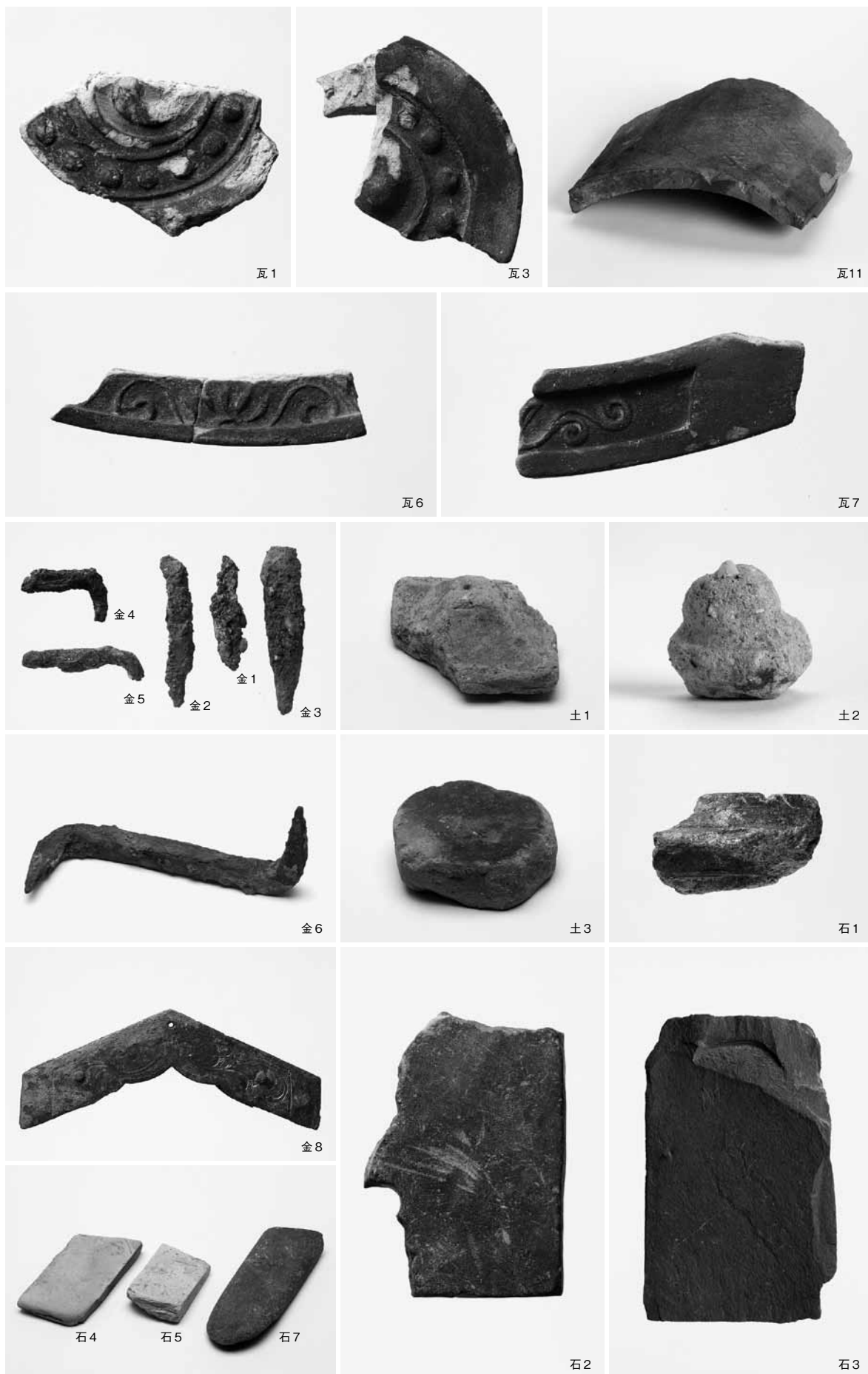


出土土器 1



出土土器2

图版 8
遺物



瓦 · 金属製品 · 土製品 · 石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	ろくはらみつじけいだい・ろくはらせいちょうあと							
書名	六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2013-9							
編著者名	田中利津子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2014年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ろくはらみつじけいだい 六波羅蜜寺境内	きょうとしひがしやまく 京都市東山区	26100	536	34度	135度	2013年6月 17日～2013 年9月18日	518㎡	校舎新築 工事
ろくはらせいちょうあと 六波羅政庁跡	まつばらどおりやまとおお 松原通大和 じひがしいるにちようめ 路東入2丁目 ろくろちよう 轆轤町82		540	59分 51秒	46分 22秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
六波羅蜜寺境内	寺院跡	弥生時代	流路		弥生土器			
六波羅政庁跡	都城跡 邸宅跡	平安時代	溝		土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器			
		鎌倉時代	包含層		土師器、須恵器、瓦、土製品			
		室町時代	柵、土橋、溝、土坑、柱穴		土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、銭貨、土製品、石製品			
		江戸時代 ～明治初頭	土坑、柱穴		土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦、金属製品、銭貨、骨製品、土製品、石製品			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-9
六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡

発行日 2014年1月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961